

42191

教科書文庫

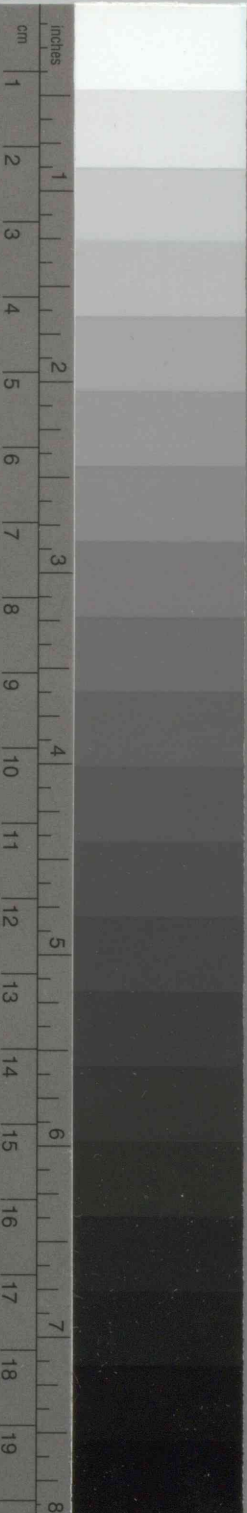
4
810
42-1923
20000 65485

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



4b
810
大12

新制 女子國語讀本

卷六



資料室

46
810
大12

教育部檢定
高等女子學校國語科用
大正二十一年一月二十七日

開成館編輯所編

新制女子國語讀本

株式會社 東京開成館藏版



新制女子國語讀本 卷六

目次

一 禁庭の野分	昭憲皇太后	一
二 日本畫と洋畫	石井 柏亭	三
三 月雪花 その一	芳賀 矢一	九
四 月雪花 その二		一四
五 四時の變遷と女子	大町 桂月	一九
六 心の糧	有馬 賴寧	二四
七 平安京	藤岡作太郎	二六
八 日本趣味の特長	河上 肇	三五

目次

九 天杯御下賜 (口語書簡文) 八 波 則 吉 四

一〇 西湖の遊 河 東 碧 梧 桐 吾

一一 初瀬の夕 德 富 健 次 郎 吾

一二 夕 暮 (口語詩) 正 富 汪 洋 三

一三 ローマの舊跡 有 島 武 郎 六

一四 十六夜日記 阿 佛 尼 七

一五 小笠原島印象記 福 士 幸 次 郎 七

一六 月の夜 樋 口 一 葉 八

一七 最後の参内 (太 平 記) 八

一八 新年葉書 横 山 健 堂 九

一九 忘れがたみ 外 山 正 一 九

二〇 一茶の童心 荻 原 井 泉 水 二〇

二一 婦人と文學的教養 本 間 久 雄 一〇七

二二 女流の俳諧 坪 内 逍 遙 一三

二三 筆の歌 (詩) 武 島 羽 衣 一七

二四 仁和寺の法師 吉 田 兼 好 一九

一 石清水 一 九

二 鼎かづき 二〇

二五 鬼作左 その一 新 井 白 石 二三

二六 鬼作左 その二 二 七

二七 師の君に (候文) 白 岩 艶 子 三二

二八 衆議院ノ國賓歡迎決議 一 三三

二九 税所敦子君を誄す 高 崎 正 風 四〇

三〇 明治大正の和歌 一 四四

三一 西行法師 新 保 磐 次 四九

自修文

一 正月前……………沼波 瓊音…一

二 原前首相靈柩の出發……………五

三 北海道の印象……………有島 武郎…一〇

四 ダリヤ (和歌)……………一六

五 女子海外留學の先驅……………西村 清山…一七

六 エトランゼエ……………島崎 藤村…二二

新女子國語讀本 卷六

一 禁庭の野分

昭憲皇太后

朝露のひるまはさしもなかりし空の俄にかき曇り、夕づつ
 の光も見えず。とかくするほどに、雨いたく降りいでて、ほ
 とり近く語りあふ人のこゑだに聞きわかぬまでになりぬ。
 閨に入る頃はなほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、
 雷さへなりはたゝきて、夢現とも思ひ定めぬに、ひまなく稻
 妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには雨はやみ
 ぬれど、風烈しう吹き出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、

昭憲皇太后、
 御名は美子、
 大正三年崩
 五。御年六十

いとゞ目も合はず。
 上^{*}には、民のためとて、畏くも遠き境に出でましたるほどな
 れば、いかなる行宮にましく、この風の音に御心を惱ま
 し給ふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますすにか。幼
 き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひ續くるほどに、夜も明
 けぬれど、いまだ風静まらず、いづこもおろしこめたる、いと
 物むつかし。軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹き折らる
 る音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折
 れ伏しぬ。今をさかりなりし眞萩も名残なく散り乱れた
 る、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、まして
 あやしげなる賤が家居などは、倒れぬるも多からんなど思
 ひやれば、すゞろに悲し。

上^{*} 明治天皇。
 遠き境 明治十四年、
 明 治十四年、
 海 道及び東北
 地 方に巡幸せ
 られた。
 皇太后 英照皇太后。



昭 憲 皇 后

おしなべて實りよしと聞きつる千町田の稻も、吹きそこな
はれつらんやなど、心にかゝりて、

科戸の神も心して

稲葉の上はよきて吹かなん

なほとやかくやと胸をいたむるほどに、いつとなく静まり
て、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心
もおちろにけり。

二 日本畫と洋畫

石井 柏亭

秋は美術季節です。この季節には、例年、上野に、二科會日本
美術院及び帝國美術院の展覽會が開かれます。いかに世
の中が不景氣な年でも、美術展覽會の入場者の數は決して

科戸の神
支那の神
も申し、
都古志
都比賣の
都神、
司る。風
を柱奈と

石井柏亭
名は滿吉、東
京市の人、明
治十五年生、
洋畫家。
上野
東京市下谷區
上野公園。

減つたことがあります。日本の秋の展覧會ほど見物人の
 の蝟集する例は、世界の他の國々にはありません。ま
 かりの春のサロンParis Salonも随分人が集ります。そして竹の臺陳
 列館の何倍あるか知れないグラン、パレGrand Palaisの建物で開催さ
 れる展覧會ですから、見物人の収容力も大きく、たとひ幾千
 の人が入つてゐても、少しも混雜してゐるやうに見えない
 のかは知りませんが、とにかくわい／＼気分がありません。
 ロンドンのロイヤル、アカデミーは建物が小さいから、一日
 の見物人の數は知れたものでせう。西洋では、小さい子供
 などを引連れて美術展覧會に来るものは殆どありません。
 また半纏着をしてゐるやうな階級の人がぞろ／＼入つて
 来て、聲高に勝手なことを喋々するやうな現象も見られま

サロン
 毎春パリで開
 かれる新作美
 術品展覧會の
 竹の臺
 上野公園の一
 部。グラン、パレ
 西曆千九百年
 にパリで開催
 された万国博
 覽會の建物の
 一、今は各種
 の美術展覧會
 に用られてゐ



(筆亭柏井石) 隅一の園農

せん。
 美術の普及といふ點から見
 れば、今日の日本の展覧會の
 方が西洋よりも一層門戸開
 放的で、より多く民衆的であ
 るといへるかも知れません。
 けれども、一般の人々に、今年
 は誰の畫が選に入つた。誰の
 が落ちた。誰のが賞を得た。と
 いふやうなことに興味を有
 たせるやうになつたのは新聞紙の力です。私どもは見物
 人の多いことを悦ばないことはありませんが、落着いた氣

分で觀て貰ひたい、わい／＼氣分はなるべく無くしたいと思ひます。

さて、よく世間には、日本畫は解るが、洋畫はどうも解らない。といふ人があります。かういふ言葉を聞く度毎に、私はその人の「日本畫は解る」といふのが甚だあてにならないと思ひます。日本に昔からある日本畫の方は親み易いし、また遺傳的にもそれがよく解ることは勿論でせう。けれども多くの場合に、その「日本畫は解る」といふのは、眞實の鑑定その他の骨董的鑑賞を意味してゐるやうです。今日では、洋畫と比較して見るのでなければ、日本畫乃至東洋畫の長所短所は十分に解らないはずになつてゐます。だから、解らないといつて濟ましてゐないで、進んで洋畫をも解しよう

とするのが當然でせう、折角のいゝものを喰はず嫌ひしてゐるのもつまらないことですから。

この頃の展覽會へ出る少壯日本畫家の作の或物が、著しく洋畫臭くなつて來たのを慨嘆する人達もあるやうですが、かういふ成行になるのは止むを得ないことです。即ちこの頃の少壯日本畫家は、皆洋畫を觀てゐますから、その眼で自然を眺めると、どうしてもそれが洋畫的に見えて來ます。その感じを偽らずに表さうとするために、その作品が洋畫臭くなるのは仕方ありません。中には、もう強ひて日本繪具を使用する必要がなく、なぜ便利な油繪具なり水繪具なりを用ひないかと思はせるやうなものもあります。さうかと思ふと、また一方には、洋畫出の人で、その油畫を描く

のに却つて日本畫の傳統を重んじて、毛筆の線墨色、または床の間に掛けるべき掛軸の使命といふやうなことに重きをおく畫を描いてゐる人もあります。さういふ風で、現今では、洋畫風・日本畫風が大分混雜してゐて、今までのやうに、日本畫と洋畫との差別がはつきりとは立たなくなりまして、私はこれもまた當然の成行で、毫も怪しむには足らないと思ひます。

日本畫は寫意、洋畫は寫實と、かう簡單に特質を定めてかゝる人もありますけれども、これもさう明かに定めてしまはれはしません、特に東西のものが互に相影響し合ふ今日ですから。^{ホイッスラー}の或作品などは隨分東洋風に寫意的でありますし、^{ターナー}や佛國印象派乃至後期印象派の

ホイッスラー
米國の畫家。
(1837-1903)
ターナー
英國の畫家。
(1775-1851)

人達の作品にも寫意的なところが多くなつてゐます。それはアンリー・マチスなどの畫を見ればよく解ります。それ

マチス
フランスの畫家。
(1869-)

れに引換へて、この頃の若手の日本畫家には、隨分寫實的なものを描く人があり、中には見當違ひの寫實をする困りものもあります。さういふ風で、日本畫は寫意を主とし、洋畫は寫實を旨とするといふことは簡單には斷言することが出来ないやうになりました。

三 月雪花

その一

芳賀

矢

煌々たる活動の日の光が西に沈めば、玲瓏たる一輪の月が休息の夜を照す。月の光は温和で、日光のやうに峻烈でない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺

芳賀矢一
福井市の人、
慶應三年生、
國學者、文學
博士、國學院
大學長。



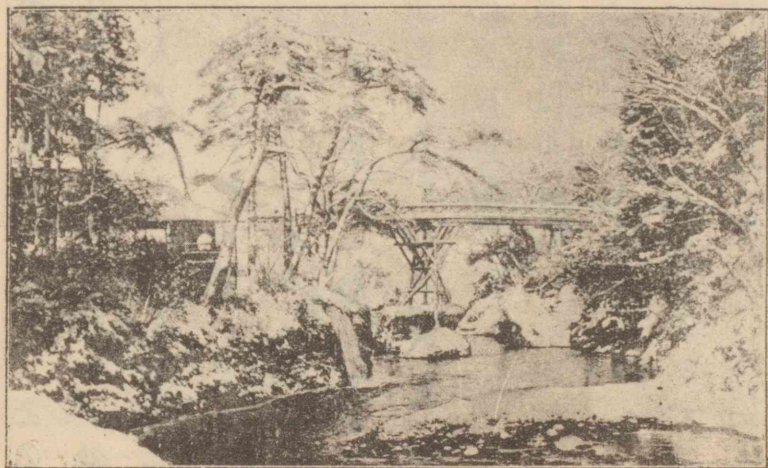
めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰は皆影を伏し、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は万象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、皎潔無垢崇美と称へるべき優しい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じ、詩的情緒が油然而として涌く。

晝間は猛獸と闘つてゐる熱帯の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光が人の胸懷に浸み渡ることは、恰もその影が干草の露の玉毎に宿るやうである。「うちむかふ月は一つの影ながら浮ぶは千々の思なりけり。」である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾万回となく幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち満ちてゐる。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷たい光が、古往今來どほどの暖みを人間に與へたか、また現に與へてゐるか。月は永久に人間の良友である。

うらむかふ
荷田蒼生子の
歌。

山中温泉の景色



雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。

花＊ならば咲かぬ梢も雜らま
しなべて雪降る三吉野の山
といふやうに、眼に入るものは悉くその下に包まれてしまふ。

＊三千世界銀成色
＊十二樓臺玉作層

の美觀は、一切の人間界の醜を掩

花ならば
僧仙覺、新續
古今集。

三千世界
唐の詩人白樂
天の詩の句。

廣寒宮
月の中にある
といふ宮殿。

ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るが如き感じを抱かせる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚しく穢く感じられる。霏々と散り紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩惑する。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の万物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中蓮の花の開いてゐる極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではなからう。

極樂淨土
佛教に、衆苦
がなく諸樂を
受けるといふ
國。

四 月雪花 その二

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層多くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲き代り咲き乱れるのは、人生としてはあまりに贅澤を感じもする。花は美しい色の外に、芳しい匂さへ有つてゐる。我等の食用のために作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理もないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じやうに、一錢をも要しないのである。若し人世に花がなかつたら、どれほど寂寞を感じるであらう。閑寂を旨とする茶

室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これはむしろ花を費んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を



(筆齋寛森) 櫻

忘れないのである。月・雪の眺は、その皎潔を愛しその清淨を貴ぶが、花はその艷麗・華美を以て人生を飾り人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美・華麗・華奢などの語

Handwritten notes in cursive Japanese script at the bottom of the page, including the characters '花やぐ', '花やか', and '花々し'.

は、皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ、

年^{*}経れば齡は老いぬしかはあれど

花をし見れば物思もなし

といふ古歌で、一切を總括することが出来ると思ふ。

月・雪花三つの眺は、各、その特徴があつて、いづれを前いづれを後といふことが出来ない

山^{*}櫻花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬^{*}ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

年経れば
藤原良房、古
今集。

山櫻
康資王の母、
新古今集。

冬ながら
清原深養父。

これは雪を花に譬へたのである。

笠^{*}は重し吳山の雪、鞋は芳し楚地の花。肩上の笠には

無影^{*}の月を傾け、檐頭の柴には、不香^{*}の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛せぬ人はない。月花を愛して雪を賞でぬ人もない。

思へば、世界の一部分には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランド^{Ice-land}では、氷は即ち人の家である。

この地方には、寸紅^{*}の人の目を楽しませるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片

の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見ることがない。ガス・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドン^{London}の住民も、秋冬の半年は、美しい月

笠は重し
談曲、葛城の
句。

アイスラン
ド
北大西洋中の
一島、面積三
九七五平方
哩、デンマル
ク領。

の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

月・雪花の眺は、古人の歴史が加つて一層の感興が増す。

世々を経て眺めし人の數にまた

我をも許せ秋の夜の月

月は古來の歴史を照す鏡である。

年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。

人生の感は花を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。二千五百年以來、月・雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたことよ、いかに多くの追慕を我等に催させることよ。

世々を経て
歌。伊藤仁齋の

年年歳々
唐の劉廷芝の
代下悲百頭二
翁上の詩中の

五 四時の變遷と女子

大町 桂月

「一榮一落これ春秋」といひけん。暑往き寒來るは天の道なり。壯なるものは老い、盛なるものは衰ふ。人の身の上もまた陰陽消長の理には洩れず。女子一生の經歷、殊に四時の變遷に似たるを感ずるなり。

春は天地の少女なり。少女は人生の春なり。東風そよそよと吹くまゝに、結びし氷解けて、溪水潺湲たる聲を發して流るゝは、嬰兒の搖籃の中に始めて日の光を仰ぎて、呱呱たる聲を放ちて乳を求むるに喩ふべし。燒野の上に萌え初めたる蕨の芽の纖柔なるは、嬰兒の手足の纖柔なるに彷彿たり。やがて咲き出づる花の色は、少女子の匂へる佛を寫

大町桂月
名は芳衛、高
知縣の人、明
治二年生、文
章家。一落
一榮一落
菅原道真が左
遷の途中、驛長
じた句、驛長
勿驚時變改
秋一榮一落是春

し、枝より枝に飛び交ひて囀る鶯の聲は、少女子の謠ふ節に象れり。されば、人々白妙の袖振りはへて、野に山に春の景色を尋ねて、ひねもす打興ずるが如く、少女の可憐にしてやうやうおよずくるを見ては、世の辛苦に窶れし父母も慰められて、心おのづから長閑かなるべし。げに春は樂しき時候なり、少年は樂しき時代なり。されど徒に花鳥に浮され、田の面を鋤き返しつゝ、種子を下すことを忘りなば、秋の收穫は得られざらん。盛年は重ねて來らず、時に及びて勉強せずして、老いて臍を噛むともまた及ぶべしやは。春去りて夏となりぬれば、木々の花散り果てて、梢には緑の葉のみぞ繁かりける。少女子の年長じては、友禪の振袖を脱ぎ換へて装ひ、またはでなるを旨とせず。この際に及び

盛年
晉の陶淵明の詩。陶淵明の盛年不重來、一日難再晨、及壯時、當及時。勵志月不待人。

ては、父母の膝下にのみは在らず。さまざまの人と交るにつれ、世の弊風に染み易きこと、花散りし梢に毛虫のつき易きが如くなれば、深く慎みて、白糸岐路の歎を免るべきなり。かくて年益長じて、人の家に嫁すれば、姑に仕へ、夫に仕へ、小姑に交り、婢僕を使ふなど、身の務彌増すにつれて、心の苦み彌増しに増すは、なほ夏深くなるにつれ、暑さ烈しく、蚤蚊など多くなりて、安らかに眠ることを得ざるが如く、春の樂しきに引換へて、心苦しきこといふべうもあらず。時には恨を子規に寄せて血を吐く思もあるべく、時にはまた夏瘦と答へて忍ぶ涙もあらん。
秋の初になりぬれば、今年も半ば過ぎしなり。我がよ更け行く月影は、いとゞ哀を添ふれども、暑さ消えて、朝夕の風涼

白糸岐路
楊子は岐路を見て歎き、墨子白練糸を見て泣いた故事。

夏瘦と
夏瘦と人に答ふる涙かな。

秋の初
秋の初になりぬれば、今年も半ば過ぎしなり。我がよ更け行く月影は、いとゞ哀を添ふれども、暑さ消えて、朝夕の風涼

今秋の秋
平清盛の秋分七
けやった歌

しく、起居いと安くなりぬるは女の身の數多の苦みを嘗めて、人の心の頼みがたきを悟り、巧みに世に處する法を覺えて、また苦しとも思はざるに似たり。やがて西吹く風身に浸みて、虫の聲々あはれなるも、しかすがに七草の花、春の花にも増して一種可憐の趣あり。女の身もまた色香や、失せぬれど、禮節に嫻ひて、よろづまめやかなる風姿は、少女にも優りて尊きを覺ゆるなり。かくて五穀果實など全く熟したれば、收穫終りて、百姓ども皆太平樂を謠ひ、和氣洋洋として鎮守の森に溢るゝは、玉の如き男子、花の如き娘ども、いくたりとなくやゝ安らかに生みて、一家團樂の中に無量の快樂自ら生ずるが如く、心にかゝる浮雲晴れて、願望の月いとゞまどかなるべし。

秋往いて冬の初になれば、小春日和麗しく、長閑かなること春にも劣らず。鳥の聲々滑かにして、立田川邊たかたがはに錦流るゝ有様は、年老いて世累なくなり、數多の子ども皆膝のほとりに集りて、反哺の孝を盡すによりて、老母の心の閑かにして、樂しくなりたるにも譬へつべし。科戸の風烈しく吹きまざるまゝに、木の葉散り果てて、満園皆枯木となりて、いとゞ寂しくなりぬるは、齒落ち、目窪み、腰は梓の弓と曲り、額の皺は齡の數とともに添ひ、形容枯槁して、見る影もなくなれる人の身の上に異らず。かくて寒さ愈募り、山川草木悉く白雪の中に埋れて、一年空しくこゝに終る。人の齡もまた愈加はり、白髪雪と相映じて、いとゞ凄じく、遂に無常の風に誘はれて、一命窮陰とともに空しくなりぬべし。

立田川
大和國生駒川
の下流、南流
して、大和川と
なる。

觀ずれば、四時自然の理、春あれば秋あり、人間必須の勢、生あればまた死なきを得ず。迷へば南山の齡も短く、悟れば蜉蝣の一期も長し。人生夢と見るも、はた眞と見るも、一に人の心の如何にあり。天地自然の變遷を解するものにして、始めてともに人生のことを語るべきなり。

六 心の糧

有馬 頼 寧

食物が肉體の糧であるやうに、學問は心の糧です。學問は生活の手段を教へはしません。學問が生活の手段になるのは、社會組織の結果によるのです。學問は自己を完成する手段です。人は生きていかなければなりません。けれどもたゞ生きていくだけでは満足することが出来ません。自

南山の齡
南山は支那の終南山をいふ、長壽を祝する辭。

有馬頼寧
伯爵有馬頼萬の嗣子、明治十七年生、東京帝國大學助教授。

己の有つて生れた才能を十分發揮するのでなければ、到底満足することは出来ません。何が不幸といつても、教育を受けることの出来ないほど不幸なことはありません。生きていくことの出来ないのも勿論不幸には相違ありません。んが、たゞ生きていくといふことだけならば、必ずしも困難ではありません。

人は生きるために働かねばならないことは、當然過ぎるほど當然なことです。だから、目覺めた人は決して生きるために働くことを厭ひません。世の中には無爲徒食してゐる人があります。そして、多くの人は、かゝる人を最も幸福だといひます。しかし、それがなんで幸福でせう。たとひそれが幸福であるとしても、苟も目覺めた人はなんでそ

れを羨みませう。目覺めた人は働いて生きたいのです、働くことによつて必ず生きていくことの出来る社會の出現を望んでゐるのです。しかし、たゞ生れてたゞ働いて、そしてたゞ死んでいくことを望んではゐません。出来るだけ完全に近い自己の一生を眺めたいのです。不用な財を積んだり、虚榮な地位を得たりするため、他人を害したり己を欺いたりすることをなんで望みませう。世の中にそんな人の多いのは、社會がそんなにしてつたのです。人は皆美しい心を有つて生れて來てゐます。若し人々が正しく働くことによつて生きることが保障され、また誰もが同じやうな教育を受けることが出来るならば、自己の才能が他人の才能に劣ることによつて生ずる自己の不幸は、自ら

これを諦めることが出来るではありませんか。

武士の階級に獨占されてゐた封建時代の教育が民衆に開放され、そして、今までは優れた才能を有ちながら抑へられてゐた民衆が十分その才能を伸すことの出来るやうになつた時に、日本の文化は世界の一等國家に比肩し得るやうになつたではありませんか。熟した木の實が地上に落ちれば、温かい土はこれを育み培うて、天をも摩する大木とならせます。そして、それらの樹木は、限らない愛に充ちた大きな自然や太陽の光と熱の恩恵によつて、その生命を支へてゐます。松も杉も檜も樺も、互に他の發育を妨げることなしにあの美しい森林を形造つてゐます。私達もこのやうに學問といふ心の糧によつて他人の自由を妨げること

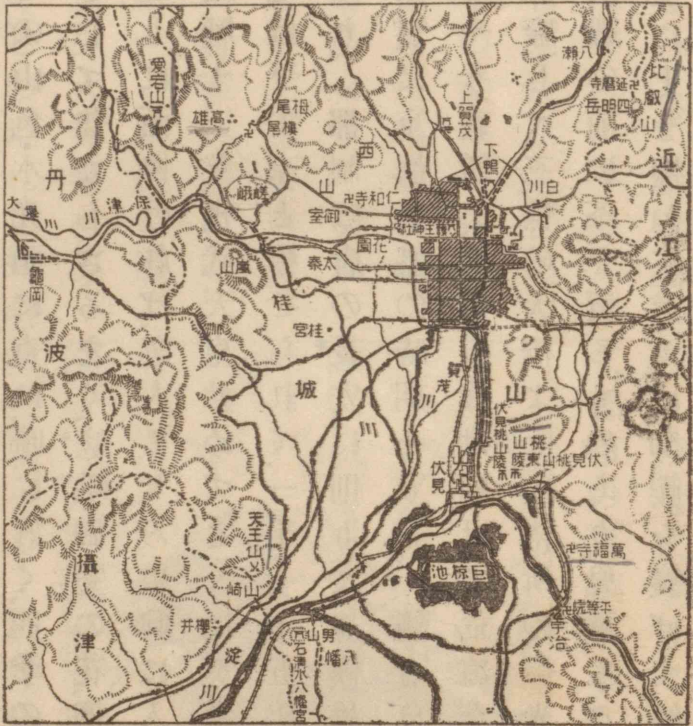
なしに、あくまでも自己を完成させたいと思ひます。

七 平安京

藤岡作太郎

平生閑靜なる田舎に住む人は、時々繁忙なる都會に出でて、人生活動の有様を見るべし。これに反して、東京・大阪等の熱鬧の地に家を構ふるものは、暇ある折々、平和なる自然の懷に入りて、勞を慰め氣を新にすべし。されど明媚なる山川もたゞ名所といふのみにては物足らず、古來の歴史に係深き舊跡を訪ひて、風景を賞し、由緒を懷ふこそ、旅行の樂みこれに過ぎたるはなかるべけれ。而してその風景と由緒とを兼ね備ふる我が國第一の勝地は京都なり。三方京都の地形は座敷の南面の障子を開きたるが如し。

藤岡作太郎、金澤市の人、國文學者、帝國文學博士、東京大學助教授、文部省勸學官、明治四十四年四月三十日。



して、底の眞砂も數ふべし。東山は松の緑目覺むるばかり

は山の襖を立て繞らし、四隅は柱の如く、前に桃山と天王山とあり、後に比叡山と愛宕山とあり。淀川・巨椋池を前庭の泉水とすれば、男山は築山に譬へつべし。賀茂川東に流れ、桂川西に注ぎ、ともに水色澄明にして、底の眞砂も數ふべし。東山は松の緑目覺むるばかり

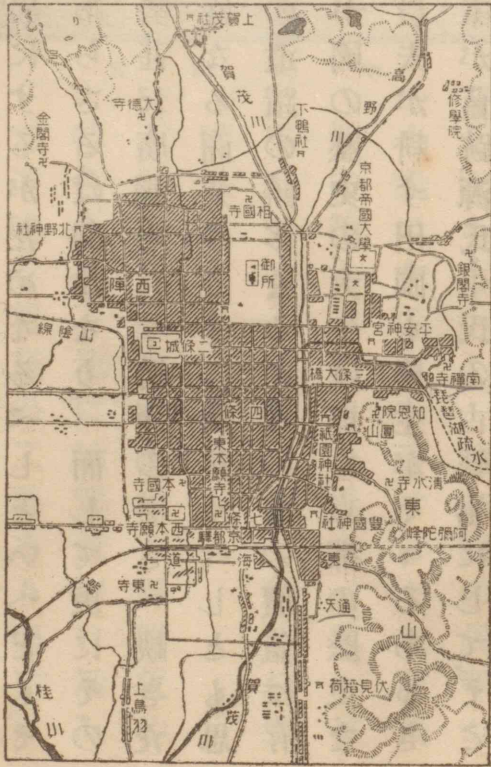
に濃く描かれ、西山は淡霞一抹、仄かに嵐山の櫻を見せたり。その山色、水光、雨に奇に、晴に好く、四季の往來、朝夕の變化、一として佳ならざるなく、嗟、峨、御室の花、通天、高雄の紅葉、とりどりに面白ければ、遊人そゞろに興に入りて歌を思ふ。

*延暦十三年、桓武天皇始めてこゝに奠都し給ひてより、この地は平安京と称せられて、一千七十五年の間、我が國の帝都たり。都制は唐の長安に則りて、規模雄大に、平安朝四百年は實に京都最盛の時期なりき。鎌倉幕府創立このかた、やうやう衰微し、應仁以後は別けて荒涼たる有様となり、皇居頽廢して、三條の大橋より内侍所の燈光を望むべく、また紫宸殿の前に茶を賣るものあり、兒童もこゝに寄り合ひ、縁の上に土を捏ねて遊ぶに、御簾を褰げて咎むる人もなかりき

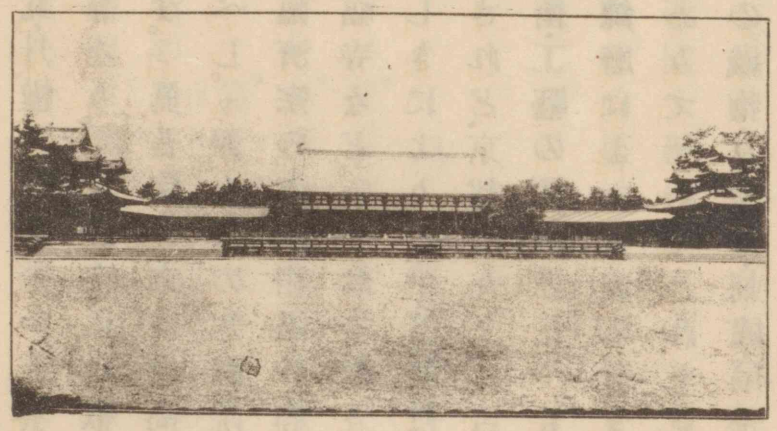
延暦十三年 (754)

長安 支那陝西省、今は西安といふ、漢唐などの都。

といふ。織田・豊臣二氏の時に至りて、稍恢復の緒に就き、特に秀吉の手によりて、都市の區劃も改正せられ、居民も安堵し、慶長以來、世の中の泰平なるに従ひて、市街は益々繁昌せり。明治二年、主上は東京の宮城に遷らせ給へど、即位の禮及び大嘗祭は、永くこの地に於て行はせ給ふことに定められたり。抑、これを既往に鑑みるに、京都の地たる、金湯要害にあらず。



古來これを守りて成功したるものなし。木曾義仲の如き、明智光秀の如き、これに據れるもの皆敗滅せるは、攻守の勢自らその元氣を異にするがためなるべしといへども、その難攻不陷の地にあらざるは勿論なり。而して更にその將來を考ふるに、地勢甚だ廣濶ならず、漕運の便さへ缺きたれば、大いなる工業、盛なる商業のこゝに興起すべしとも思はれず。たゞ古代の遺蹟の饒多なるにこの地の價値は存するなり。實に我が國の歴史の大半は即ち京都の歴史なり。されば到る處、農夫が耕す田圃も、學生がそゞろあるきする野路も、貫之、定家が舊跡、源氏、平氏の古戰場にして、そことも知らず湮滅したるも少からねど、名家の遺蹟の今に残れるもなほ多く、左顧右眄飽くことを知らず。昔ドイツの



平安神宮

文豪ゲーテはイタリーを巡遊してより、著しくその思想を豊富にしたりといふ。我が國の馬琴ウマコトが小説にその名を著せるも、京阪漫遊の後なることを思ふべし。日本に於ける京都は實に歐洲に於けるイタリーの如し。大社と巨刹の多きは京都附近の特色なり。北には賀茂川に沿ひて下鴨、上賀茂の二社あり、南には男山に據りて石清水八幡宮あり。平安神宮は桓武天皇を祀りて、碧

ゲーテ
ドイツの詩人
1749-1832
馬琴
本名瀧澤解、
徳川末期の小説家、
嘉永元年(1828)歿、
年八十二。

瓦丹楹人目を驚かし、賽人の最も多きは祇園・北野・伏見・稻荷等なり。天台宗には叡山の延暦寺、四明の蔭に隠れて見えぬ。眞言宗の東寺は高塔巍然として、汽車の窓よりも望むべし。浄土宗の知恩院、眞宗の東西本願寺、日蓮宗の本國寺、臨濟宗の南禪・相國・妙心・大徳・天龍・東福等の諸寺、黄檗宗の萬福寺など、いづれも堂々たる伽藍なり。清水寺は風景の美しきによりて、平等院は建築の古きによりて著る。されど、京都はたゞに古代の遺蹟の饒多なるのみならず、美術・工藝の淵叢としてもまた全國に冠たり。げにや、時代の鍊磨によりて成るべき精緻なる手工は、この地の如き歴史ありて始めてこれを見ることを得べし。清水の磁器、西陣の織物、友禪染・刺繡・扇子・短冊等の類は、他に匹敵するものな

く、繪畫はまた東京と相並んで互に優劣を争ふ。近年京都帝國大學の設立ありて、學問に於ても一方の中心となりぬ。既往の盛は將來の榮を促すべく、千年の舊都の今後の發達、蓋し刮目して見るべきものあらん。

八 日本趣味の特長

河上肇

* 荒海や佐渡に横たふ天の川
* 春雨や人住みて煙壁を洩る

* 易水にねぶか流るゝ寒さかな

右のやうな俳句を誦してゐると、僅々十七音の中に、一幅の畫圖が歴々として眼前に浮ぶ。これが純粹の日本趣味で、實に世界獨得のものである。僅々十七音から成る詩形は、

河上肇 山口縣の人、明治十二年、法學博士、京都帝國大學教授。
* 荒海や 松尾芭蕉の句。
* 春雨や 與謝蕪村の句。
* 易水に 同前。
鳥の水に流るる河

西洋諸國いづれの國に於ても、到底見出すことは出来ない。また古い時代の俳句には、多少禪味が籠つてゐる。一音をも發しない禪學などは、普通の西洋人のどうしても解することの出来ない微妙な性質を有する學問である。我々日本人は大建築を有せず、科學を發明せず、機械を發明しない代りには、西洋人の有してゐない茶室を有し、禪學を有し、俳句を有してゐる。我々には、西洋人が我々の有してゐない多くのものを有してゐるのを見て、直ちに彼等を偉い人種であると驚歎してしまふ傾向があるが、眞の評価はなにも急ぐには及ばない。よく見ると、彼等もまた我々の有する多くのものを有してゐないのである。西洋式では、すべて物を分析して、簡単な單位に還元する流

があるが、かゝる簡単な單位は、それ自身獨立させては意味をなさないから、自然の結果として、多數の單位を集めて、その全體の上に意味をあらせようとすることになる。そこで、分析の結果として綜合といふことが起る。しかし、その綜合は分析を経た後の綜合であるから、日本流の最初からあまり分析を試みずに物を一纏めにするのは、甚しく趣の違つたものである。

まづ手近なところから二三の例を擧げてこれを説明すると、かの盆栽の趣味の如きは、全く日本の趣味である。分析もない代りに、同じ單位のものを集めて、集め方の上に趣味を出したといふ性質のものでもない。たゞ一本の樹なら樹を、幹と枝と葉と自らこれを一纏めにして見て、そこに干

年の星霜を経た巨樹大木の趣致を味ふといふわけである。菊花を賞するにしても、根元に附いた葉までも見棄てずに、幹なり葉なり花なりを一纏めにして賞するのである。しかるに、西洋には此の如き意味の盆栽はない。菊花を賞するにしても最も美しい部分の花だけを切り離して賞するのである。随つてたゞ一つでは面白味がない。なるべく澤山にこれを集めて、しかる後に、全體の上に何等かの面白味を感じ美事さを味ふのである。

庭園の造り方にしても、西洋流では一本々々の木を離してしまつてゐる。それゆゑ、たゞ一本の木を見ただけではなんの面白味もないが、その代り、西洋人はその一本々々の木を一定の間隔をおいて行儀正しく植ゑこんで、全體の上に

何等かの面白味を出してゐる。だから、自然の結果として、西洋の庭園には左右均齊といふことが原則となつてゐる。しかるに、日本固有の庭園には、さやうな人爲的の子供らしところとは全くない。京都でいへば、金閣寺の庭にしる、銀閣寺の庭にしる、いづれも左右均齊の主義を採つたところは一つもない。山川池澤草木巖石、自然に相集つて自ら絶景をなす深山幽谷の状をそのまま、一纏めにして、これを縮圖したものが日本の庭園である。人爲的の分析もなければ、人爲的の綜合もない。

この意味に於て、日本趣味は實に自然的であるが、これと同時に、他の意味に於ては實に人爲的である。全體に於て自然の形を存しようとする點に於ては、實に自然的であるが、

金閣寺
本稱鹿苑寺、
禪宗、足利義
滿建立。
銀閣寺
本稱慈照寺、
臨濟宗、足利
義政建立。

全體に於て自然の形を存しながらも、これを美ならしめるがために、その組成分子に甚しい人爲を加へ、なほその人爲の跡を蔽はうとするが故に、その組成分子に對しては、種々無理な註文が全體のために要求されることとなる。金閣寺の庭にしる、銀閣寺の庭にしる、松の木一本、松の枝一枝が、決して思ふまゝに手足を伸してゐるわけではない。全體の調和を保つために、或は枝を切られ、或は幹を曲げられながら、甚だ窮屈な思をして生を保つてゐるのである。盆栽となつた松にしてもまた同じことであつて、決して思ふ存分に伸びたものではない。西洋人が見て、いかにもひねくれた人爲的のものだと思ふのも、この點からいへば無理はない。



金閣

しかし、余をしていはせると、西洋の庭園こそ、或意味に於て甚だ人爲的のものである。勿論個々の木は思ふ存分に伸びてゐる。山なり原なりから抜いて來て植ゑたまふである。この意味に於ては實に自然的で、各箇の樹が自由を享受してゐる。けれども、此等箇々の樹を集めて一つの公園としようとする時、西洋式にいけば、そこに驚くべき人爲が加はり、またその人爲の跡を蔽はうとせず、いかにも露骨にこれを現してゐるのである。

九 天杯御下賜

八波 則吉

天杯御下賜！ 母上様お目出度う存じます。遙かにお祝ひ申します。陛下が御即位禮を行はせられるについ

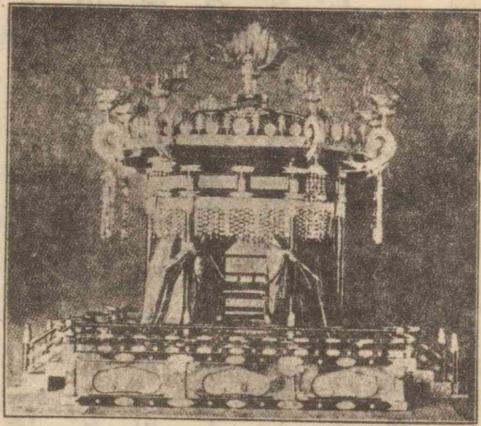
八波則吉 福岡縣の人、明治九年、第五高等學校教授。天杯御下賜 大正四年今上天皇御即位禮の際、全國の八十歳以上の高齡者を下賜した。御即位禮を賜はさる。大正四年十一月十日

て、八十歳以上の長壽者に天杯御下賜の旨が新聞紙上に傳へられるや、私は飛び立つやうに喜びました。そして、取敢へず兄上に御祝状を差出しました。すると、兄上の返事に、「残念なことには、六箇月不足のためその數に洩れられた。」とありました。私は非常に落膽しまして、縣廳に、どの縣下も満八十歳以上かどうかと尋ねに參るつもりにきめておりました。ところが、翌朝の新聞で、數へ年で宜しい、調べ直せ。」との恩命があつた由を知つて、母上様、實に私は蘇生しました。

蘇生といへば想ひ出します。一昨年の夏、あなたが九死一生の場合、私はあなたの枕に取りついて、「お母様、あなたは私の力です！」と無我夢中に叫びました。その聲が昏

縣廳
石川縣廳、作
者は當時第四
高等學校教授
であつた。

睡状態のあなたのお耳に響きまして、「この皺くちやの婆を、子なればこそ則吉は力にも思つてゐるのか。」と仰せられ



今上陛下御高座

れました。それからあなたは、「出来ることなら助けて下され。」と氏神様に祈願なされ、奮發してお薬も飲まれ、お粥も啜られ、そしてやつと蘇生されました。と、かうあなたから後日承つたのです。果して私がその刹那、「お母様、あなたは私の力です！」と叫んだか否かは、私の記憶には判然しません。が、しかし、母上様、今日でもあなたは私の力です。「故郷有、母秋風、涙。」

紅葉
夕風

これは事實です。「ふる里に老いたる母の在すなり、いたく
くを吹きそ秋の夕風」。これも赤子の至情です。たとひ、
あなたの腰は屈り、眼は薄く、歩行は自由でなくても、「吾に
母あり！」との念が、いかに遊子の意を強くするものでご
ざいませう。況や八旬の高齡で尙且壯者をも凌ぐあな
たの御健在はよ。母上様、實にあなたは私のためには千
万人力でおあり遊ばします。

*大鏡といふ書物の序文に、

「むかし、賢き御門の御政のをりは、國のうちには年老いた
る翁、嫗やあると召し尋ねて、古の掟の有様を問はせ給
ひてこそは、奏することを聞し召し合せて、世の政は行
はせ給ひけれ。されば、老いたる身はいとかしこきも

大鏡
八卷、作者未詳、
文德天皇
から後一條天皇
まで百七十年
間の歴史。

のに侍り。若き人達を侮り給ひそ。」

とあります。もとより片山里の賤の女が、何等國政の足
しにはなりもしますまいが、しかしながら、代々の御門は
畏くも、

*まづく 天下の公民の上を慈しみたまはく……」

と宣らせ給うて、まづ養老のことを遊ばされます。我々
人民を「おほみたから」とさへ仰せ遊ばされるのです。そ
して、

まづく
元明天皇御即
位の宣命。

*この食國天下を撫でたまひ慈しみたまふことはこと
だつにあらず、人の祖のおのが弱兒をひたしをさむる
ことのごとく治めたまひ恵みたまひ來る業となも神
ながらおもほしめす。」

この食國
同前。

と古い時代の宣命にも見えてゐます。即ち代々の聖天子様は、國民を子のやうに御慈しみ遊ばされるのでございませぬ。洩れ承るところによれば、大嘗祭に於ても、ひたすら民安かれとお祈り遊ばすのださうです。有難いとも勿體ないとも、たゞ感泣する外はありません。

民のため時ある雨を祈るとも

知らでや田子の早苗とるらん

これは後醍醐天皇の御製だとか承つてゐます。實際さうです。「親の心子知らず」です。年毎の祈年祭に、一天万乗の大君様は、手肱に水沫かき垂り、向股に泥かき寄せて、御親ら豊年をお祈り遊ばされ、年毎の新嘗祭には、新穀を皇祖皇宗に奉らせ給ひ、大嘗祭には御親ら御神饌を御親

後醍醐天皇
第九十六代。

手肱に
祈年祭の祝詞
の句。

供遊ばし、報本反始の禮をお盡し遊ばされるさうです。

葦原の國富まささんと思ふにも

青人草ぞたからなりける

これは先帝陛下の御製ださうです。百二十二代の各天

斯生ふ夜況佳辰幸福如
る歳く大禮年か恩寵源倚祈
國勢之御振

大正四年春
祝詞大典ハミヤ山

歌祝奉の元久方士

皇様方
が、皆か
やうに
人民を
御愛撫

遊ばし給ふのであります。臣民たるもの、赤子の至情を盡さないで宜しいでせうか。

天杯御下賜！ 母上様、年寄はやがて家の寶であります。

斯生兩度説三
佳辰、幸福如
余有二人、
大禮參加恩寵
源、偏祈國勢
五洲振
大正四年春
祝詞大典
八十叟泰山

土方久元
高知縣の人、
前宮内大臣、
伯爵、大正七
年没、年八
十六。

で、至尊に於かせられても、まづ老人を御愛撫遊ばすのでございます。聞くところによれば、我が國は世界で名高い長命國ださうです。この度、天杯御下賜の光榮に浴する高齢者が四十万人にも及ぶさうです。「養老」の朱杯に酒肴料までお添へ遊ばされるとか承ります。四十万人に天杯と御酒肴料、これだけでも大した御費用かと存じます。これを思へば、子たるもの、孫たるもの、親を慰め、祖父母に仕へないで何としませう。孝が即ち忠です。親に仕へるのは君に仕へる所以です。母上様、私ども同胞があなたに盡すのは、恐れ多くも、今上天皇陛下の大御心に副ひ奉るのでございます。これを思うて、私は幾夜か感涙に枕を濕しました。畏くも陛下は、何縣何郡何村大

字何字何といふ片山里のあなたをば非常に御鄭重に御愛撫遊ばされます。然るに、私、あゝこの子たる私があなたにどれほど盡してゐましたらう。思へば慚愧に堪へない次第です。端書一枚であなたの御心を安めることの出来る時にも、あゝこの不孝な私は、いやな夢を見たが達者か。と、あなたに問はれたことさへもありません。

天杯御下賜！ 母上様、始めて夢が覺めました。どうぞ達者でゐて下さい。あなたは私の力です！ そして私もあなたの力となります。別封、その一部は氏神様への御神酒料です。その餘はあなたのお友達に一献差上げて下さい。氏神様のお蔭です、御近所の方々のお蔭です。氏神様と御近所の方々と、皆して陛下の万歳をお祈り遊

ばせ。私も地方賜饌の光榮に浴します。これもあなたのお蔭です、皆様のお蔭です、氏神様のお蔭です。

嬉しさを何に包まん唐衣

袂ゆたかに裁てといはましを

嬉しさが袖や袂に包みきれないといふ意味の古い歌です。私も嬉しさが包みきれず、遂に筆を執つて斯くは認めました。

一〇 西湖の遊

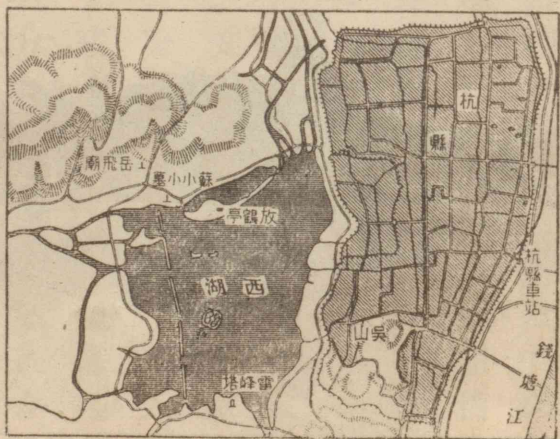
河東碧梧桐

杭州車站に下車して、晝飯を済して後、すぐ洋車を吳山の麓まで驅つた。穢い狭い民家の間から登り始めて、少し小高い丘の上に出ると、そこに杭州城を半圓に遠く巻いた錢塘

嬉しさを
讀人知らず、
古今集。

河東碧梧桐
名は葉五郎、
松山市の人、
明治五年生、
杭州人。
今、杭州といふ、
浙江省にある。
錢塘江、
杭州灣に注ぐ

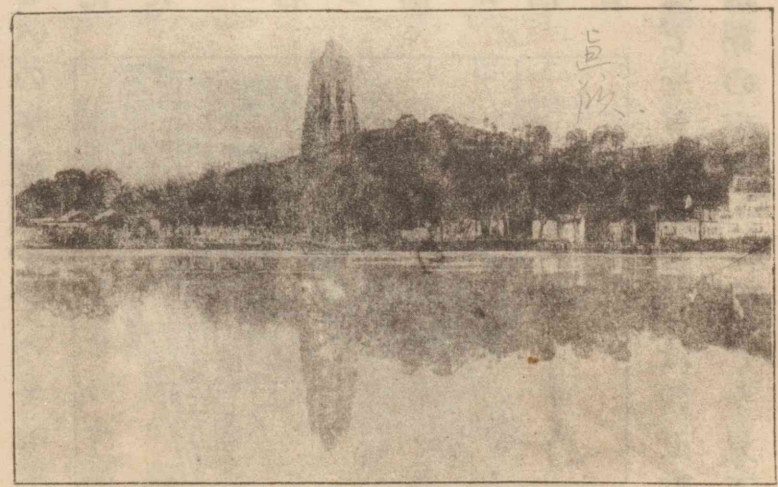
江の眺望があつた。風も吹かないので、爽快なすつきりした氣持になつて始めて足下にただ白壁を塗り重ねたとしか見えない杭州城内の建築と、吳山の一角の出張つた山の磊塊とした岩石との配合が、錢塘江の水を待つて一幅の男性的な油繪になる構圖に興を催すのだつた。日本から渡つた鐘を吊つてゐる寺や、四五台の轎子に釣られて來た身分のありさうな女づれの寺參りなどを見ながら、なほ四五町も登ると、今度は右に雷峰塔と西湖の東南の一部とを見下



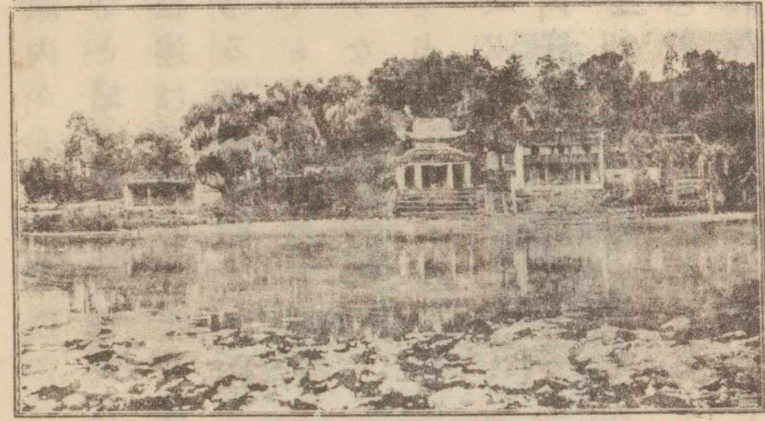
河。

杭州人々七つ後
湖の西はあつたから
西湖の遊
本寺の右は錢
塘江と書いてある

す眺望に逢着した。西湖の中には大小二つの島がある。それが正しい圓さである上に、葉の茂つた柳でぐるつと水を區切つてゐる。ほうと霞んだ、靜かに湛へた水に、しだれた柳が落着いた柔かな味を添へてゐる。支那にもこんな纏まつた景色があるのだと、物憂さとだるさから目覺めた私は、山を下りてから、城内をぶらつく足元も明るく力づいたものにな



湖 四



亭 鶴 放

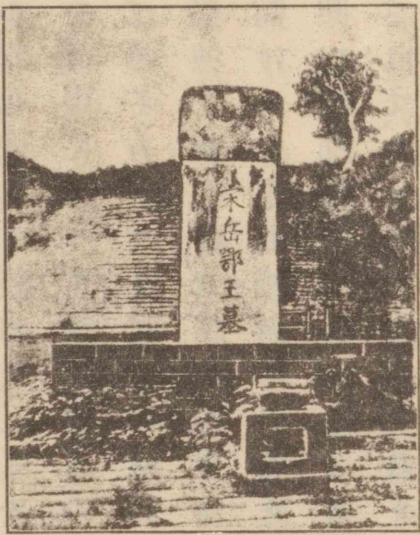
つた。城内の西湖に瀕する處は、昔の城壁が取壊されて、外國人の租借地を眞似た四五十呎の押開いたバンドが、ずつと一直線に凡そ一哩の長さに出てゐる。そこには、三四階の支那宿が西洋式の窓を開いて軒を並べてゐる。旅人の宿泊心を唆る。まるで避暑地の海岸の氣分だ。廣東の城内から租借地の砂面に歸つたやうな沈痛を靜かさでなく、落着いた杭州

城内からこの湖邊のバンドを行く心持には、華やかな静かさ
 さと蟬りのない輕快さが漂つてゐた。
 私達はこのバンドを洋車で駈けぬけて湖の北側に立つて
 ゐる新々旅館といふ支那旅館に入つた。支那旅館といつ
 ても瀟洒な煉瓦造で、玄関をはひつた廣間に球台のあるや
 うな行届いたホテルなのだ。私達はその湖に面する一室
 を占領して、ゐながら西湖の眺望を擅にする豫定だつたが、
 その豫定はまんまと外れて、雞や豚を飼ひ放しにしてある
 内庭に面する奥まつた二階の一室を當がはれ、そこに行李
 を卸すべく餘儀なくされた。
 ともかくも日のある中に出來るだけの遊覽をしようとい
 ふので、旅館前からすぐ小舟を浮べさせて、林和靖の故跡の

林和靖
 名は遺、宋の

放鶴亭や岳飛廟を經めぐつた。舟はやつと四人までしか
 載せられないボートの舳艫の詰つたものだ。船夫は杓子

高士。
 岳飛。
 宋の忠臣。



岳飛の墓

の大きい權を執つて、船尾に
 腰掛けて操縱する。日覆の
 白い布は船の長さだけ張つ
 て、四人の座席は籐椅子で手
 輕に組立ててある。青史を
 血に染めた悲壯な事實も、高
 風の万世に仰がれる隱逸の
 傳説も、今の支那では遺憾ながら何等の感興をも惹かない。
 故跡の外形は殘存してゐても、故跡の情味は疾くに泥土に
 委してゐる放鶴亭、蘇小々の墓、岳飛廟、岳飛の墓、それらの過

蘇小々
 一名は簡々、
 南北朝時代の
 女詩人。

去の史傳の傳へた強烈を感興と、現在の故跡の示す落莫たる光景とのあまりに隔絶した相違、それを仔細に觀てゐるには堪へられなくなる。はては今昔の感とでもいふものか、うら悲しく涙ぐましくなる。それよりも、この一葉の舟を湖中に浮べて、滑かな水の上をどこを指すともなく漂つてゐる方が、せめてもの林和靖の高風を今に實現する詩的感興を喚ぶのだ。實際湖中に漂つてゐると、氣は澄み胸は豁ける。支那漫遊の外客といふやうな氣分も、この大陸の興亡の瀬戸際といふやうな心持も、總べて忘れられ洗ひ落されて、たゞこの自然と我とが融會してしまふやうな氣がする。馬鹿にいゝ氣持になつて、日のくれどに宿に歸つて來た。亀の甲を仰向けにしたやうな支那風呂ではあつ

と合ふ

たが湯を浴びることの出來たのも意外なことだつた。夜に入ると、珍しくいゝ月だ。私達は晝間の扁舟に坐して、東坡堤の水門を潜つて、廣々とした湖面に出た。晝間は彼方此方に白い日覆が、さも鷗でも浮んでゐるかのやうに往來してゐたが、今はどう見通しても舟らしい影は目に入らない。たゞ東岸のバンドに立並んだ旅宿の燈が、漁人のそれのやうに水にきらついてゐるだけだつた。清風徐來、水波不起。とか、月明星稀。とかいふやうな文字は、たゞさういふ文字として目に映ずるが、その文字の齎す詩人の胸裏には突入し得ない、それも今日の支那の國情では已むを得ない、自然であるかも知れないと、舟中の二外客は妙に大人びた氣になつて、この清風明月を我が物顔に振舞つてゐた。

小舟

清風徐來
蘇東坡の句
壁賦の句
月明星稀
魏の曹操の短
歌行の句

ともかく、あのバンドに上つて更に一杯の酔を買ふのも一興ではないかといふことになつて、船首をその方に向けた。「鳥鵲南飛」といつたやうな夜空がしいんとして、飽くまで静かさを押しつけてゐる。くつきりした西の山なみは、晝間よりもずつとあとじさりしたもののやうに、私達から隔絶してしまつた。尊い淋しさが折ふしの漣に連れてひしひしと私達の胸に浸みこむのだつた。

一一 初瀬の夕

徳富健次郎

耳梨山を左に、天香久山を右に見て東走し、櫻井で汽車を降りるとすぐ初瀬行の輕鐵に乗り換へる。輕鐵の小さな客車は櫻井から東を指して、がた／＼と二十分ばかり谷間を

鳥鵲南飛
魏の曹操の短
歌行の句。

徳富健次郎
號は蘆花、熊
本縣の人、明
治元年生、蘇
峰の弟、文學
者。
耳梨山
奈良縣、大和
三山の山。
天香久山
同縣、大和三
山の山。

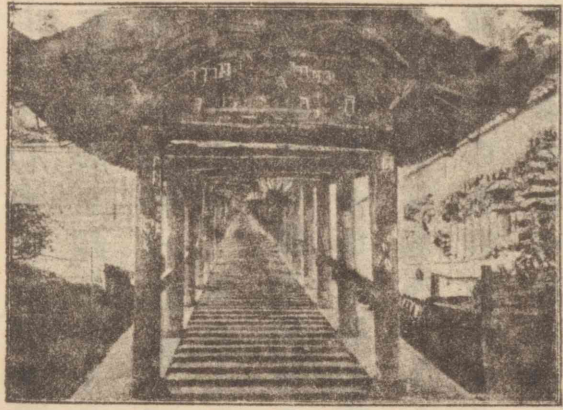
上つて、終點初瀬驛に着く。車で石ころの坂路を挽き上げられて、初瀬の町は紀の國屋の店頭に信玄袋を卸すと、すぐそのまゝ長谷寺に急がす。もう秋の日は落ちかけてゐる。爪先上りの初瀬町の往き止りで車を降りる。西に折れて、石盤を歩いて仁王門に入る。すぐ廻廊の屋根下である。緩勾配の石段が次第に上方に導く。數間おきに金輪の燈籠が下つてゐる。廊の左右は玉石を疊んだ牡丹の花壇が續いてゐる。長谷寺の生命はこの廻廊にあるの



長谷寺金景

櫻井
奈良縣。
初瀬
奈良市の東南
六里二十町。
長谷寺
初瀬にある、
眞言宗。

だ。長い〜廻廊は仁王門から西に攀ぢ登つて北に折れ、
稍暫く登つてまた西北に折れ、かくて本堂に登り着く。



長谷寺の廻廊

今眞盛りである。初瀬の町は赤地錦の袋に包まれて、その

百九間半、四百幾十の石段を登り
果てて、山腹に建てられた本堂の
舞台に出た。世を捨てた西行法
師が、捨てられて尼になつた昔の
妻に、ゆくりなく廻り會うたはこ
こであつたか。本尊の観音様は
あとにして、まづ舞台の端から見
下す。向ふの山も此方の山も燃
え立つ焔の山かとはかり紅葉は

西行法師
俗名佐藤義清
鎌倉時代
建久元年
（一一八五）
七十八
年

底に横たはつてゐるのである。

もう仄闇い内陣に、鎌倉＊のと同作の観音様など拜ませて貰
うてゐる内に、日は落ちてしまつて、焔の山は紫に暮れ、蒼い
朦朧の漂ふ谷に響いて入相の鐘が鳴り始めた。その鐘の
音に送られつゝ、我儕も廻廊の降口にかゝる。煙の如く立
迷ふ黄昏を仄かに照して、廻廊には最早燈籠に灯が入つた。
黙つてその灯の連続を見下してゐた我儕は、やがて仄かな
その光を便りに、一段々廻廊の石段を降り始めた。
えもいはれぬいみじの薄明りよ。こゝに大正二年はない。
どうしても源氏物語から抜け出して來た白い顔の玉鬘＊か、
さもなれば差俯く墨染の西行が登つて來なければならな
い。美しいもの哀れ深いものに出遇ふ期待をどこやらに

鎌倉のと同
作の観音
神奈川縣鎌倉
町大字長谷寺
海光山長谷の
觀音本尊十一
長谷は觀音國
同木で作つて
ある。

大正二年
作者の妾詣し
た年。
玉鬘
源氏物語の中
にある女性の
人形、夕顔の
遺児、後光の
源氏の寵女と
大將に嫁した。

漂はせながら、我儕は一段々廻廊を下るのである。時々立ち止つて後を見返ると、昔から限りない人の炷いた心の香が一つに融け合うて作つたかと思はれる薄青い朦朧を見せて、仄かな火がぼつり／＼上へ／＼と上つてゐる。下の方を見ると、下へ／＼とその火が續いてゐる。一たび折れる、二たび曲る。最後に長い／＼廊の灯が遙かに下に續いてゐる。どうしても誰かに何かに會はねばならない氣がする。しかし、期待は破れた。我儕は人一人にも會はずに到頭三折の長い廻廊を仁王門に下りてしまふた。

一二夕 暮

正富 注洋

ゆふぐれの雑木林の中

正富注洋
名は由太郎、
岡山縣の人、
明治十四年生

文學者。

落日が揃く木のかげ草のうらげ
次第々々に暗くならく行く世界
あゝこの境地も語らばきくならん
秋の夕暮きこののである
吾儕も今夕に静かに味ふべきものだ
わたりも今夕に現れて来る
手の大きい農夫があつたから
優しく嬌しくその手を握り
／＼また近寄りて来る
一疋の犬があつたから
その手を優しく静かに撫でよう

一三 ローマの舊跡

有島 武郎

「月の半面より更に廣い面積を有つてゐるのはロシアだといはれてゐる。そのロシアの土もローマの一尺四方の土が含むほどの歴史は含んでゐない。」とツルゲーネフは嘆じてゐる。フロレンスといふ都もある、ヴェニスといふ町もある、アッシシといふ邑もある。しかし、ローマといふ一つの名は、それらのすべてから飛び離れて大きく位してゐる。ローマ。短い名だ。しかし、なんとといふ長い意味であらう。「永遠の都城」といはれるローマ。「大理石の砂漠」と呼ばれるローマ。三百二十の勝戦で飾られたローマ。歴史の桂冠たるローマ。幾多の帝國の墓石なるローマ。地球の表面

有島武郎
東京市の人。
明治十一年生
文學者。

ツルゲーネフ

ロシアの作家
(1818-1889)

フロレンス
イタリア半島
北部の都

ヴェニス
同上。

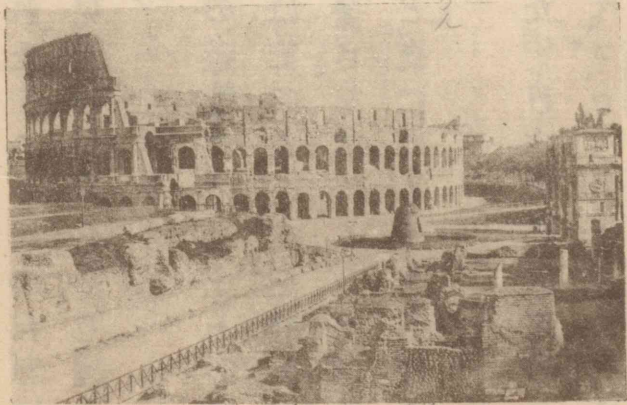
アッシシ
イタリア半島
中部の聖地
高僧の生地
として有名な
小邑。

又二の舊跡

にローマといふものの放り出されてゐるのは、骰子が神の手から誤つて人の眼前に放り出されたやうなものだ。ローマを見た人は、神の賭する運命を見たのだ。しかし、誰が正しくそれを理解し得よう。ローマに入つてから、私達はローマの遊覧には最上といはれる十月を迎へた。毎日々々太陽は雲のない空を靜かに暖かく照した。日中には、時折夏の暑さを道行く人に思ひ起させるやうなこともあつたけれど、夜になると空氣は水晶のやうに冷えた。その十月一日は十四夜に當つてゐた。日本大使館附の一
中佐は、私達を日本風の晚餐に招いて、コロシニウムに月を見に行かうと言ひ出した。私は喜んでそれに應じた。

コロシニウム
ローマの大演
戯場、第一世
紀の建築物で
今なほ残存し
てゐる。

馬車が幾度か曲角を曲つて走り続ける中に、秋の空は蒼茫として暮れていつた。家々の窓からは、黄色い灯が見え初めた。馬車が或坂道を九折に下ると、テイトの大浴場の邊から、既にコロシユームの物々しい外壁が、夜の影の中に斷崖の如く見え渡つた。その重黒い大きな團塊を照して月が東方の人家の屋根から大きな涼しい姿を現した。革で張つた馬車の腰掛がひやひやするほど空氣は澄んでゐた。私達はなんとなしに大きな聲で物をいふのが憚られるや

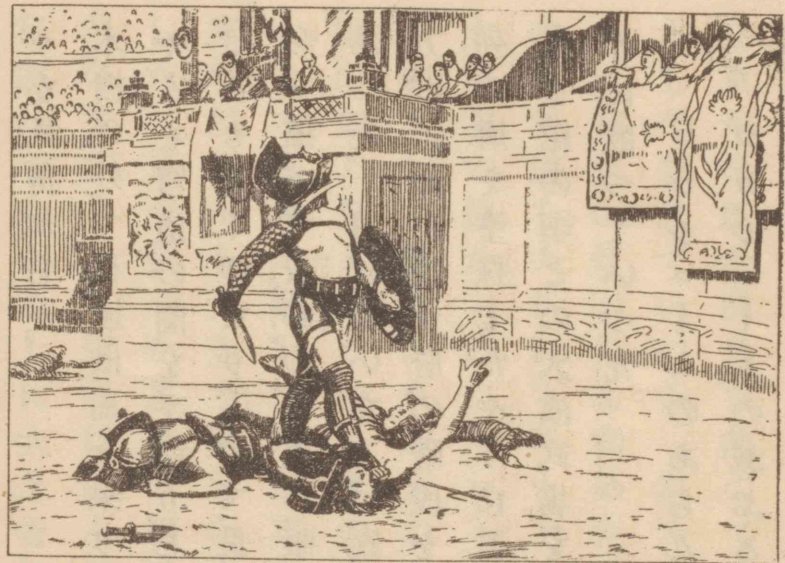


ローマのコロシユーム

うな氣持がした。

木柵の外で、私達は馬を乗り捨てた。そして大トンネルのやうな穹道の闇を手探りしながら通り抜けた。眼の前に、音もなく静まり返つて、長さ三分一哩に達する土積に卵形を描いて、灰華トラスルグの石塊が、眼に餘る高さに積み重ねられてあつた。月に背いた方は黝然としてたゞ暗く、月に向つた方は、斜面に幾十層の階段をなして、疊み上げられた座席の列が、燐を塗抹したやうに眞珠色に光つてゐた。八世紀の頃、この大演武場を訪れた遍路の客は、豫言するやうに歌つていつた。

「コロシユームのあらん限りローマはあらん。
コロシユームの滅ぶる時ローマは滅びん。」



而してローマの滅
ぶる時世界もまた
滅ぶべし。

から歌はれた世界の要石
たるコロシユーム、それは
私の眼の前になんといふ
冷たい淋しい姿だ。

私達は夜寒を身に覚えな
がら、座席の最高所からア
レーナを見渡した。月の
光を受けた荒れ果てた贅
の上には、虫一つ生きてる

アリーナ
演技場。

るやうには見えなかつた。たゞ場の中央に、一基の十字架
が孑然と立つてゐた。紀元第八十年、^{タイタス}タイタスがこの大工
事を竣工した時、その落成が記念されるために、百日の祝祭
が催されて、五千頭の野獸が競技のために屠られたと称せ
られる。そして綺羅に装はれた五万の觀衆は、東方の染料
で眼も覺めるばかりに染め上げられた日覆の蔭にあつて、
毎日競技の進行を喝采しながら見物したのだ。それ以來、
この地點の歴史は、鮮血の歴史といつていゝ、人間がその獸
性を鮮血とともに湧き立たせた悽慘な歴史といつていゝ。
そこでは^{グラディエトル}グラディエトルと外國の捕虜とが互に殺し合つ
た、獅子と人間とが互に噛み合つた。幾万の^{キリスト教徒}キリスト教徒
が十字架の上で殺され且焚かれた。ローマの人はその血

タイタス
ローマの皇帝
(41-81)

グラディエトル
格闘士。

を見、その煙を嗅いだ。そして不自然な昂奮に酔ひしれたのだ。しかし、時はすべてのものを葬る。そこには今一滴の血も残されてゐない。たゞ石が黙して冷たい。私達が妙に考深い氣持になつて立ち盡してゐる間に、月は高く天心に上つてゐた。イタリーの空は屢、高原の空を想ひ起させる。その底力をこめて澄みきつた藍色の奥深く、小さく月が懸つてゐる。星は稀だ。人間が歴史を残すといふことは、自然に對する冒瀆ではないのか。

一四 十六夜日記

廿七日。明けはなれて後、富士川をわたる。朝川いと寒し。

阿佛尼
藤原爲家の
室、鎌倉時代
の人。

數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる。

さえわびぬ雪よりおろす富士川の
かは風こほるふゆのころもで



尼 佛 阿

今日は日にとらゝかにて、田子
の浦に打出づる海士どもの漁す
るを見ても、

心からおりたつ田子のあま
ごろもほさぬうらみと人に
かたるな

といふ處にとゞまる。

廿八日。伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。いまだ夜

伊豆の國府
伊豆國三島
町。

田子の浦
駿河國蒲原の
あたり。

廿七日
後宇多の天皇
建治元年(九三
三)十月。

深かりければ、

たまくしげ箱根の山をいそげども

なほ明けがたき横雲のそら

足柄山は道遠しとて、箱根山にかゝるなりけり。いとさか

しき山をくだる、人の足もと、ままりがたし。湯坂とぞい

ふなる。辛うじて越えはてたれば、また麓に早川といふ川

あり。まことにはやし。木の多く流るゝを、いかに。」と問へ

ば、「海士の藻塩木を浦へ出さんとて流すなり。」といふ。

あづまぢの湯坂を越えて見渡せば

しほ木をがるゝ早川のみづ

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに、とまるべきところと

ほし。伊豆の大島まで見渡さるゝ海面を、いづことかいふ。」

湯坂
湯本から西に
山の尾を登り
鷹の尾を登り
の北西を統
の北西を統
に箱根を統
に至る山徑
の北西を統

と問へど、知りたる人もなし。海士の家のみぞある。

あまの住むその里の名もしらなみの

よするなぎさに宿やからまし

丸子川といふ河を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒さけ勺すくと

いふ處にとゞまる。明日は鎌倉に入るべしといふなり。

丸子川
今の酒勺川。

一五 小笠原島印象記

福士幸次郎

横濱から海上六百哩、日數に積ると船上五日間の航海で、汽

船はいよく、十一月二十四日小笠原島に着くといふので、

全船をんとなく賑つてゐる。その朝八時頃、私は船室から

前部の甲板に出て見ると、まづその行手の海上に、宛として

朝日に赤く雲上に輝く日本アルプニッポンアルプの連峰を見るやうに、赤

福士幸次郎
弘前市の人、
明治二十二年
生、文學者。

茶けた島山が角度鋭く、遠く水平線上に連立してゐる奇觀に驚いた。

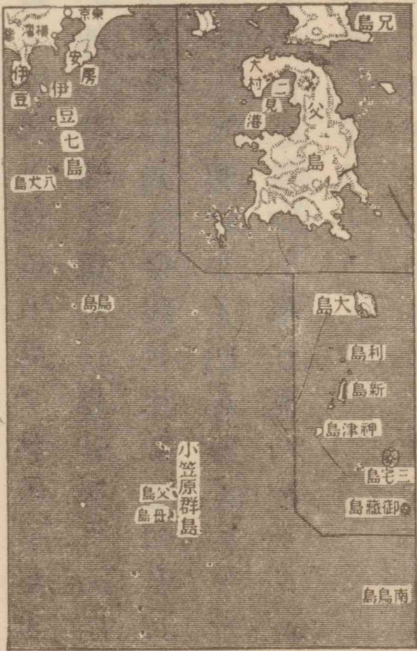
昨日まで汽船はたゞ南へくと太平洋を下るやうに進んで來た。思へば、東京を立つ時、この何日か前の薄暗い寒い日、横濱行の電車の窓から、芝山内の森の見えるあたりで、その冬らしい灰色の密雲の鎖した陰暗な首府の空に最後の一瞥を投げたのも、今は遠い彼方の世界のことである。波の荒く黒い海上一日路程の伊豆七島の最南端八丈島へ着いても、このうそ寒い冬空の景色は失せなかつた。しかるに、船が黒潮を突き破つて、南へくと進むに従つて、空氣は温かく、夜毎の星は赤く大きく輝いて、空と海とはまたなく淨らかになつた。

芝山内
増上寺の境内のこと。

伊豆七島
大島・利島・新島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島
東京を距る百三十里、周回凡そ十里半。

海の怪にでも憑かれさうな、塵の一つづつも見えるやうな明るい月の夜、または白い腹を日に閃かしながら海豚の群の遠く水上を傲つていく春めいた長閑かな晝の天氣、汽船は正しく椰子の葉の茂る洋中の樂土、その亞熱帯の雰圍氣をもつ自然圏内に刻々進んでいつてゐるのである。

チョコレート色の地の肌、目の覺めるばかりの鮮かな緑を點綴した極彩色の孤島、鳥島を、海上一里ぐらゐる向ふに見



鳥島
八丈島の南三
十餘海里の青
原島から南小笠
原に至る五六の
無人島をい
ふ。近來は三
子(みっご)島
を特に鳥島と
いふ。

た時、相客の大学生は、「丁度明日の今頃小笠原に着きます」と、寢床の中からにこやかな顔を出して教へてくれた。さうだ、あれは昨日の晝頃だつた。そして今は、さきがた昇つた朝日が、洋中に、その黄金色の射光を、黒みのある、しかし實によく澄んだ大洋の水に浸してゐる朝の八時である。水平線上の島は、雲の上にその連る群峰を纔かに見せて、その山腹は雲霧の中に没して、赤くその角々を陽に染めながら水上に並んでゐる。「恍惚」といふ言葉があるが、私はこの小笠原島着の何時間か前に、まづ島を遠望し得た最初からこの恍惚を経験したのであつた。

赤く陽に輝いた島が追々に大きくなり、根元の岩が見えるやうになる。すると、初は一つに見えた他の島々が、いつか

そこを離れ去つて、波間に見えなくなる。眼前に屹立する島は益々大きくなる。私達の船は、いつか、無人の、併しいかにも陽氣を感じを與へる白堊輝く岩山を両方に見て、一つの美しい瀬戸に入る。それがやがて四邊の風光が繪のやうな灣となつて、その真中に私達の汽船はがらくくと錨を投げ煙突から白い湯氣を吐くとともに、伸びやかに汽笛を鳴した。時刻は正しく晝に近かつた。

繪のやうな極彩の景色、實に私達の汽船がその時投錨した二見港の周圍の景色は、正に譬へやうのない美しい風景畫である。私はこのどこといつて内地に似通つたところのない珍しい景色にすつかり魅せられてしまつた。こんな山もあるのかと思はれるぐらゐの山が、甲板から仰いで見

二見港
父島にある。

ねばならないほどに、両肩を高
くそびやかかし、その山ふところ
の草木の茂みで青くなつてゐ
る處へ、赤茶けた檳榔樹が點々
と各處に心持よい配色をして
育つてゐる。五すぐ下の村は海
に臨んでゐるが、環形をして續
いてゐる白砂の海岸にこんも
りと茂る木立のために殆ど屋
根は隠されて、たゞ見えるのは
西洋の片田舎にあるやうな白
ペンキ塗の教會堂の塔ばかり



二見港の防波堤

ペンキ
オランダ語の
「ペン」のなまり。

だ。晝前の日ざしは、この一村を覆ふ濃緑の林や檳榔樹の
生ひ茂つた山を華やかに照してゐる。海岸からは綺麗な
鼠色の防波堤が突き出て、その根元に赤い屋根の小舎があ



小笠原島の檳榔樹

り、その横に棕櫚の
大木が茂つてゐる。
下は紺色の海水、ど
こを見ても豊かな
鮮明な着色。その
色に見惚れてゐる
と、あたりの山々か
ら長閑かな鶯の聲が海を傳つて聞えて来る。なんといふ
閑寂な澄んだ、そして色彩豊かな樂天地だらう。

この五日ばかり馴染んだ船から愈解へ乗り移つて、例の防波堤内に入り、やがて生れて初めてこの島の地を踏み、立木に隠れた島山直下の村の一本通を進んだ。両側はやはり内地の田舎町のやうに、いづれも草屋根の家並だけれども、材料が違ふのか、その屋根々は皆赤茶けて、背後に南洋特有の濃く茂つた潤葉樹を負ひ、路はまた同じく赤茶けた美しい土に、純白な菊目石を内地の砂利のやうに氣持よく敷きつめてある。一町ばかり歩いて、杉の焼木の小門のある宿屋に來た。そこには火のやうに眞紅な花が、その蔓を兩側の柱に絡ませて咲き乱れてゐる。もうすぐ十二月に入るといふのに、こゝではこんな暖かい。私達はかうしてこの小笠原島の親島たる父島の首府大村に、その第一日目

の宿をとつた。

一六 月の夜

樋口 一葉

村雲すこしあるもよし、なきもよし。磨き立てたるやうなる月の影に、尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし。三味も同じこと、琴は西片町（西片町、かたがは）あたりの垣根ごしに聞きたるが、いと良き月に、弾く人の影も見まほしく、物がたりめきて床しかりき。親しき友に別れたる頃の月いと慰めがたうもあるかな。千里の外までと思ひやるに、添ひても行かれぬものなれば、たゞ羨しうて、これを假の鏡となしたらば人の影もうつるべしやなど、はかなきことさへ思ひ出でらる。

樋口一葉
名は夏子、
梨縣の人、
學者、明治
二十九年
歿、
二十五
年

西片町
東京市本郷
區

さゝやかなる庭の池水に揺られて見ゆる影物いふさまにて、手すりめきたる所に寄りて、久しう見入るれば、初は淨きたるやうなりしも、次第に底深く、この池の深さ、いくばくとも測られぬ心地になりて、

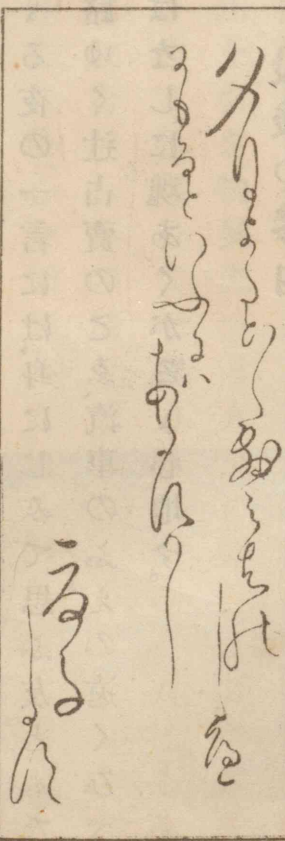


樋口 一葉

形とも思はれず。物狂はしけれど、箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゝ波すこし分れて、これにぞ月の影たゞよひぬる。かくはかなきこととして見せつれば、甥な

も測られぬ心地になりて、月はその底の底のいと深くに住むらんものやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見たるに、空なる月と水の影といづれを眞の

る子の小さきが眞似て、姉さまのすること我もする。とて、硯の石いつのほどに持ち出でつらん、我もお月さま碎くなり。とて、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを、身に傳へていと大事に思ひたりしに、はかなきことにて失ひつる、罪得がましきことと思ふ。この池かへさせてなどいへども、いまださながらにてなん。明けぬれば、月は空にかへりて名残もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん。夜なく影や待ち取るらんとあはれなり。



一葉筆蹟

夕月よたどたど敷みちのしるべにもなどいふにはあらずかし
夏子しるす

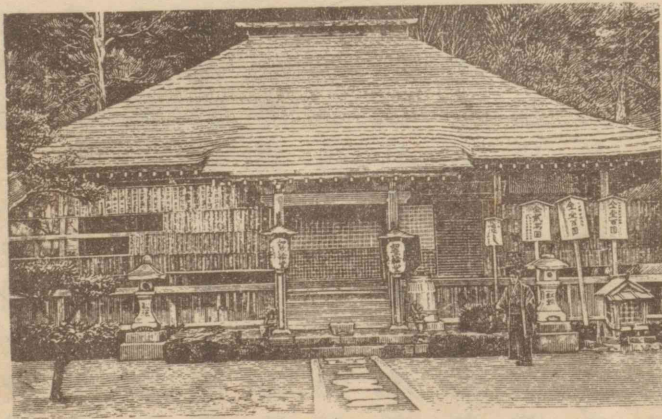
嬉しきは月の夜の客人まろと、つねはうとくしくなどある人の、心安げに訪ひ寄りたる男にても嬉しきを、まして女の友のさるべき人ならば、いかばかり嬉しからん。自ら出づるに難からば、文にてもおこせかし。歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には、身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占賣のこゑ、汽車のふえの遠くひゞきたるも、何とはなしに魂あくがるゝ心地す。

一七 最後の参内

阿部野の合戦は霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷

阿部野
攝津國東成郡
天王寺・住吉
兩村の間
霜月
正平二年(100)
十一月

膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情あるものなりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を温め、藥を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乗るものには馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば、敵ながらその情を感じずる人は、今日より後、心を通せんことを思ひ、その情を報せんとする人は、聽て彼の手に属して四條繩手の合戦に討死をぞしける。さて今年兩度の合戦に、京勢無下



如意輪堂

兩度の合戦
河内國畷田林
の戦、攝津國
阿部野の戦。

に打負けて、畿内多く敵のために侵し奪はる。「遠國また蜂起しぬ。」と告げければ、將軍左兵衛督の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。「今は、未々の源氏、國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えず。」とて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

將軍 足利尊氏 左兵衛督 足利直義

京勢雲霞の如く淀、八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、疋弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく乱れて、逆臣西國より攻め上り候ひし間、危きを見て命を致すところ、豫ねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂

先朝 後醍醐天皇

に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷成り候ひしを、合戦の場へは伴はで、河内へ歸し、「死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け參らせよ。」と申し置きて死にて候。然るに正行、正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯され、早世仕ること候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直、師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今

討死 延元元年五月十七日

一度君の龍顔を拜し奉らんために參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。
 *主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の

鎮守社壇回祿事仕へ
 勢入仕祿存石統
 失火中津時奈惠代
 身傍了清道斬くうる
 是因くや深く
 中津時
 正行

鎮守社壇回祿事仕へ

主上 後村上天皇。
 鎮守社壇回祿事仕へ
 事、殊に驚嘆
 不入候。但體
 御坐候條、中
 御代之奇蹟、言未
 語道斷候。念
 可細々謹言一
 候。恐々
 五月廿六日
 正行
 觀心寺々僧御中

安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とするところなれば、今度の合戦命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんがためなり、退くべきを見て退くは、後を全うせんがためなり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地に附け、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。
 正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書き列ねてその奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓
と一首の歌を書き留め、逆修のためと覺しくて、各鬢の髪を
切りて佛殿に投げ入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へとぞ
向ひける。(太平記)

一八 新年葉書

横山健堂

新年に新年葉書を點檢するは一種の興味あり。近ごろ新
年に名刺を郵送すること流行す。名刺は訪問に換ふるの
意葉書に比すれば一層緊切なるが如く、葉書よりもその手
數と郵税との繁なるを以てして、敬意を表することもまた
一層の鄭重を加ふるの形なきにあらず。しかれども、趣味

横山健堂
名は達三、
治五年生、
章家。文明山

は名刺よりも葉書にあり。

蓋し新年の郵便に於ける封送の名刺は訪問の意を表せど
も、叩扉の音を聞きてその人を見ざるが如く、夜水雞を聞く
の思なきにしもあらず。葉書はその面を見ずと雖も簾を
隔てて相語るが如く、心胸面目我が眼前に躍如たらずんば
あらず。

古より「警咳に接す」といふ語あり。葉書はその本來の効用
は、單に警咳に接するのみの感想に過ぎざるものなり。殊
に未知の人より始めて一片の葉書を得たる時は、汽車中に
て偶然隣客と數語を交換せるの思をなすに止るべし。
新年葉書は自ら別種の興味を有す。新年葉書は概ね既知
の人より來れるにあらざるはなく、その名と人さまとの

賀正の一句とを見れば、その人に對するあらゆる平生の感想湧く。即ち新年葉書はその人を象徴するものならずばあらず。

新年葉書の他の往復書信と異なる所以は、知人間に限れる一種の公開状態にあり、たゞ一樣の文章を以てすべての知人に對するにあり。而してこれを接手する知人は、千差万別の情緒を以てこの一樣の文章に對するなるべし。

這般の意義よりすれば、新年葉書は力めて意匠を凝し、以て自家の性格と趣味とを表現せんことを要す。表現の鮮明なればなるほど、受信者の享受する感動は益痛切なるを致すべし。故に新年葉書は筆墨の巧拙を問ふにあらざるを以て、他人にその意匠を託するは斷じて不可なり。

他人に託して意匠を凝せる新年葉書は、必ずしも不可なりといふにはあらず。その巧妙なるものは、新春屠蘇の前に一粲を博するに足るべし。他人の意匠なりといふとも、またこれ本人の趣味を表現せるものたるを失はず。しかれども、此の如きは、到底言に訥なるもの、他の辯に雄なるものを備ひ來りて、己に代りて新年の辭を述べしむるが如きのみ。代演はたとひ絶妙なりとも、訥辯なる本人の自らいふの情味あるに若かず。

人去り燈孤にして、火鉢の活火ひとり生氣を縦にす。この時席を拂つて茶を喫み、案頭の新年葉書を檢し來れば、知人の面目畫くが如く、一々我が眼前にあり。その人と靜境に細語しつゝあるにも似て、情緒纏綿として盡きず。

新年葉書は「謹賀新年」の四字を以て最も普通なるものとす。或は更に簡明を求めて、約して「賀正」の二字となせるものもあり。而して多數の人が口頭の賀詞の一致するが如く、葉書に於てもこの四字或は二字を用ふるを普通とす。新年葉書はその實用よりすれば、たゞ新年の意味を適切に發表するを得ば足れりとすべし。「謹賀新年」「賀正」の四字・二字は、正にこの意義に適應するものなり。されど、新年の賀客同じく「賀正」の一語を述ぶるも、その服裝の一樣ならず、脱帽・叩頭の一動・一線に至るまで万人万様なると等しく、僅々這般の四字・二字を手書するも、なほその書風・字體等に多少の異同なき能はず。またたとひ印刷すればとて、活字の大・小・異同・インキの色彩、種々様々の變化あるを見るなり。

今年始状といへば、殆どその多數は新年葉書なるを常とし、書面となせるは甚だ稀なり。世務愈繁にして、禮意益簡に流る。名刺を封送するは鄭重の趣意に出でたるなるべけれども、簡を求めて已まざるものもまた名刺を封送す。その簡の窮まれるものは、單に普通名刺を郵送し來れるもあり。幸に新春の時機に來れるを以て、受くるもの以て「賀正」の意なりと解釋せざるはあらず。この場合に於て、この普通名刺は最も解り易き一種の謎たるを失はず。禮は簡を嫌はず、意の深きを貴ぶ。賀正の文はいかに短きも差支なし。たゞ紙面・字畫すべて整齊なるを要すること、禮服は絹衣のだらしなきよりも、木綿のきちんとしたるを心地よしとするが如くならざるべからず。

新年の禮装の上に人格趣味の表現せらるゝと同じく、新年葉書の表にその人格趣味・素養・漢學的・ハイカラ的・蠻カラ的、すべて流露せざるはなし。

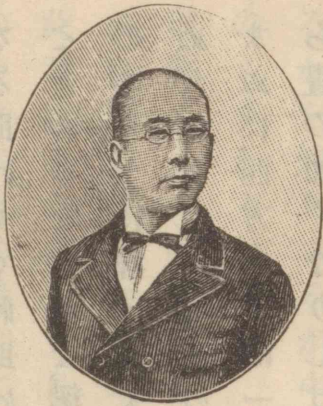
一九 忘れがたみ

外山 正一

げに人ははかなきものなり。今日の夜はまだ過ぎざるに、只管明日・明後日のことにのみとかく心を移しがちにて、いかなる天の災がすぐ眼前に迫ればとて、一寸先は闇の警、明日ともいはず、今宵の中に深き淵瀨に陥ることもあらん身とはつゆ知らずして、百年の計をなすこそあはれなれ。泣くものも、笑ふものも、喜ぶものも、怒るものも、舞ふものも、唄ふものも、樂しむものも、齊しく一度に聞きたるは地底に

外山正一
博士、文部大臣
明治三十三年
歿、年五十五

聞えし大山の崩るゝばかりの響をりけり。凄じき勢にて大地は下より突きあげられ、地上はさながら激浪の打つが如くに震ひ動けり。



安政二年十月二日、時刻は夜の亥の外刻かとよ。地裂け天墜つるかと驚正山かれたり。

安政二年
孝明天皇の年
号(五三)
亥の刻
午後十時頃。

れ瓦に打たれて死せるもの幾許なるかを知らず。一時に落ち来る千万の瓦、一時に崩るゝ百万の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和し、譬ふるに物もあらざりけり。暫くして、地の震やゝをさまり、崩るゝ家の響薄らぐに随ひ、あとに

残りて聞ゆるは、親を呼ぶ子の聲なりけり、子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、殊にあはれに聞ゆるは、次第々々に細くなる、助けてくれ、助けてくれ。の聲なりけり。

ことわりなるかな、梁に壓さるゝものあり、柱に挟まるゝものあり、土に埋るゝものあり、壁に敷かるゝものありて、さらぬだに苦しむものは多かるに、地の震ふこと未だ止むか止まぬに、四方の天は一面に次第々々に明るくなりて、さながら晝の如くなりしは、處々方々の潰家より火は炎々と燃え出でて、燄の天を焦すなり。家に潰されて身は動かさず、悶え苦しむその處に、燃え来る火のために、煙に咽び熱さに耐へかね、遁れんとしてあせれども遁るゝことかなはねば、聲を

家

か

限りに叫べども、助けに来る人はなく、無間の地獄、阿鼻の熱、無慚といふもあまりありけり。

この夜わづかの時の間に、死したる人のその数は幾千万なるかを知らざるが、中にはいとあはれなる死にざまのものも多かりけり。

運強くして不思議にもその身は万死を遁れたれど、親、兄弟の無慚の死をそゝるに悲しむものもありけり。

此等は人の身の上なり。我にもこの夜の話あり。父はこの夜は宿直の番にて、家を守り三人の子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は母の左右に寐ね、末なるは乳母に抱かれて枕邊に臥しゐたりき。あるまじきことなれども、すは地震よ。といふと齊しく、乳母

指送り
翁

は抱きし子を捨てて、我のみ外へと逃げ出でたり。
 母は啼く子を抱き上げ、右と左に寐たる子を揺り起さんと
 あせれども、稚子を抱へし身にて、大浪に揺らるゝ如く動き
 つゝ、片手に起す左右の子は、冬の夜の寐入りばなとて、起せ
 ども起せども、いつかなく、起くればこそ、夢ながら母に連
 れられて外へ出でたる時は、地の揺るゝも止みしあとにて、
 四方の天は火事にて既に眞赤になりゐたり。
 實に危かりしは我々親子の命なりけり。そも安政の地震
 には、水地なる舊家の潰れぬものは稀なりしが、我等が住ひ
 し舊家も潰れぬばかりに傾きたり。今において想ひ起す
 も身の毛よだつはこの夜のことなり。この地震にて我等
 が家の若しや潰れもしたらんには、我等兄弟は死したりと

水地
 本所・深川
 たりの
 低地を
 いふ。

も、誰をも恨むべきならねども、若し母の死したらんには、我
 等が罪にてありたるならん。
 さりながら、この夜若し我等親子が死したらば、何故母が死
 せしかは、世に知る人はなかりしならん。生くべかりしを
 子のために死せりとは誰か知るべき。
 今もなほ忘れざるは、久しき昔のこの夜のことなり。げに
 ありがたきものは母の愛なり。母はその身の危きをも顧
 みずして、一心に子を助けんとなししものなり。
 げに深きは親の恩なり。我に今日あるは、この愛を以て育
 てくれたる母ありしがためなり。我は自ら知らざれども、
 我が母がこの夜の如くに、その身の危きをも顧みずして、我
 我の身を護りくれたるは幾度なりしか知られざらん。

この夜のことは亡き母の我には忘れがたみなり。この夜我々親子より運拙くして死せるものには、助かるべきを子の故に死したる母の幾許なるらん。

この夜の如き天災の今日の夜にも起らんには、助かる命を子のために捨てんとする母親は幾許なるか知られざらん。げに深きは親の恩なり、忘れがたきは母の愛なり。

二〇 一茶の童心

荻原井泉水

一茶といふ人は尊い人であると私は思ふ。それは彼がいづまでも子供らしさを失はなかつたところにある。人は誰でも齡を取つていくにつれて、感情が堅くなり、分別臭くなり、理窟つぼくなり、物に感激することが少くなり、す

荻原井泉水
名は藤吉、東
京市の人、明
治十七年生、
文學者。
一茶
小林氏、信濃
國の人、徳川
末期の俳人、
文政十年(一六
七〇)歿、六十

べてのことに新鮮味を失つてしまふ。これは仕方がないといへば仕方がないかも知れぬが、若しこゝに或人があつて、その人はいつでも子供の時のやうに柔かい感情を持つてゐて、自然を愛し、自然のすべてのものに自分と同じ喜びや悲みを感じることが出来、世間臭い因襲や儀禮に拘束されないうで、自由に振舞ひ、自由に歌ひ、そしてその自由が、子供の自由のやうに、他人に迷惑をかけることのないばかりか、他の人から微笑を以て眺められるとしたならば、それは稀な人といはねばならぬ。かういふ稀を尊い人として、私は一茶を見るのである。

試みに、一茶の藝術たるその俳句集を開いて見よう。

雀の子そこのけくお馬が通る

晝飯をたべにおりたる雲雀かな
ほろふりよ精出してふれ翌は盆
どれほどに面白いのか灯とり虫
初螢なせ引きかへすおれだぞよ
おんひら／＼蝶も金毘羅まるりかな

蛙
きき
瘦かへるまけ
一茶是に
俳諧寺

一茶筆蹟

朝やけが喜ばしいかかたつむり
赤い月あれは誰がのぢや子供達
下りよ雁一目散に我がまへに
おとなしく留守をしてゐる蝿おとこづ

蛙たしかひ
瘦かへるまけ
るな一茶是に
有俳諧寺

お祭に赤い出たちのとんぼかな
あとの人三つ栗三つひろひけり
うまさうな雪がふうはりくと
どんぐりのねん／＼ころり／＼かな
かういふ句を拾つていけば際限がない。彼の句全體の三分の一は子供の心になつて歌つたものである。現今童謡が持囃されてゐる。それは子供が作つたものばかりでなく、大人が子供の頃に持つてゐた純眞な心の故郷を尋ねようとする心持から歌はうと試みるものだが、一茶の句などは、それが皆立派な童謡といつて然るべきではないか。彼が口を開けば無造作にかやうな句を歌ひ得たのは、彼の心が常住に子供心の自然な自由な純眞な境地に住してゐた

ために外ならない。

我と来て遊べや親のない雀

これは彼が六歳の時に作ったものとして名高い句である。彼は幼い頃から立派な童謡詩人だった。この氣稟が老いることなくして益成長したのだった。だから彼が永久の子供だったといふことは、彼の天稟にさういふ性情があつたのだらう。彼は親のない雀を歌つた當時、慈母を失つてゐたのだが、その後彼に繼母が出来た。その母の腹から弟が生れた。それから彼には悲しい虐げられる日が續くやうになつた。少年の時、遙々江戸に出されてからは、また困苦と侮辱とに堪へて生きねばならなかつた。かういふ境遇の下に長じた人は、とかく若い時から老成して、悪賢く、疑

深く、打算的になりがちのものであるが、一茶はそれとは正反對な人となつたところを見ると、永久の子供らしさは全くその稟性だつたものと思はれる。

二一 婦人と文學的教養

本間 久雄

文學藝術に對する教養の程度は、直ちにその人の人間としての價値を示すものです。言葉を換へていへば、その人がいかほど文學藝術を愛好し理解してゐるかといふことによつて、その人がいかほど高尚な人であり、いかほど人間としての味ひの豊かな生活を送つてゐる人であるかが解るのです。實際の事實について見ても、文學藝術の愛好者には、どことなく品があります、どことなく人間として精練さ

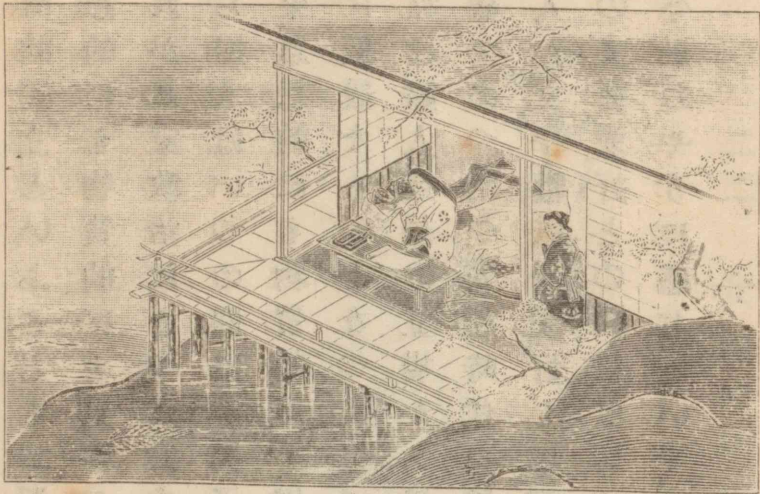
本間久雄
米澤市の人、
明治十九年生、
早稲田大學教
授。

れたところがあります、手觸りが柔かで、どことなく深みがあります。といふのは、文藝を理解することによつて、その人は人生そのもの人間そのものを理解し味つてゐるからであります。これに比べると、どんなに立派な着物を着てゐようが、どんなに富を持つてゐようが、文藝の理解を持たない人は、どこか下品です、すべてが物質的で、手觸りが堅く、人間としての情味を缺いてゐます、つまり一種蠻的な感じを人に與へます。西洋でも、心ある人は最近頻りにリファインメントといふことが、人間としての教養の最大條件として説かれてゐます。リファインメントとは、上品で、高雅で、人生に對する理解があり同情があるといふことです。これは確かに人間教養の第一條件であるに相違ありません。

ん。この意味から、文藝に對するその人の理解と愛好とは、直ちにその人の人格を象徴してゐるといふべきです。そして、これは婦人の場合に於ても無論眞理であり、同時に文藝の理解と愛好とは、婦人の教養に於て一層重大なものとなるわけです。

右の事實は、單に一個人の場合に於てばかりでなく、一國の場合に於ても同じです。つまり、文學藝術の如何によつて、その國のその時代の文化または文運のいかなるものであるかを容易に知ることが出来るのです。この意味で、文學とか藝術とかいふものは、一國文運の華であると同時に、その國の文明を批判する唯一の標準であるといふべきです。これは古今東西の歴史のよく證明するところであること

はいふまでもありません。或一つの國で、文學・藝術の盛な時代は、その國の文運の最も盛な時代です。そして、婦人が文學・藝術の旺盛に與つて力のある場合には、婦人が思想的にも感情的にも社會的にも十分に認められてゐる時代です。これもまた古今東西の歴史のよく證明するところでは、試みに例を我が國に取りますと、かの平安朝時代の如きがそれです。即ちこの時代は、婦人も男子と同じく、思想的にも感情的にも乃至社會的にも、人間としての權利を主張し得た時代であります。紫式部・清少納言・和泉式部等の閨秀作家が輩出したこの時代は、單に我が國に於てばかりでなく、婦人運動の立場から見れば、世界の歴史に於て屈指の黄金時代だつたのです。



石山寺の紫式部（宮川長春筆）

と婦人氣質といふ書物を著してゐるブラッドベリといふ人などは、平安朝時代を以て、婦人運動の立場から黄金時代であると解釋してゐる一人です。實際この平安朝時代は、婦人の位置が非常に高かつた時代です。婦人が非常に尊重された時代です。またこの時代は、今日世界の問題になつてゐる婦人の經

ブラッドベリ
アメリカの
人。

宮川長春
尾張國の人、
大和繪の妙
手、寶曆二年
（西曆一七六二）
七十一。

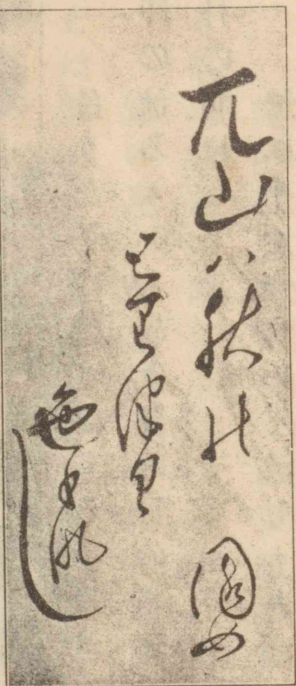
濟的獨立といふことも立派に實現されてゐた時代です、思想的にも物質的にも、男女が一切同權だつた時代です。それが武家政治になつて、武力が最上のもものと崇められてから、婦人はいつの間にか男子に隸屬するものとなり、その結果、思想的にも物質的にも、婦人の位置が男子に比して非常に低級なものとなつたのです。

私は、婦人運動の立場から、思想的にも物質的にも、男女が同權であつた平安朝時代を憧憬すると同時に、その時代の婦人が文學・藝術を愛好し理解したことを考へて、文化と婦人の文藝愛好との間には、切つても切れぬ關係のあることを、今更のやうに感じないではゐられません。

二二 女流の俳諧

坪内道遙

徳川時代には、女流にして俳諧を能くせしもの少からざり



園女筆蹟

き。千代女・園女・すて女・智月・秋色・花讚などあり。皆同じ頃の人なり。
*園女の句に、

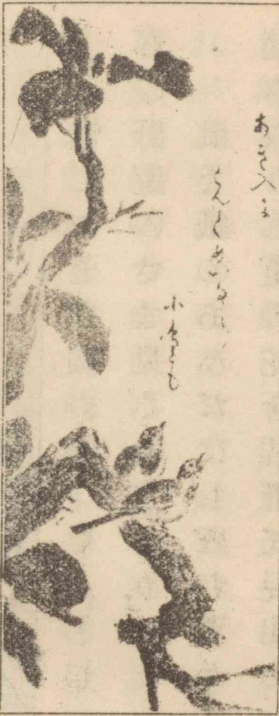
園女
伊勢國松坂の
人、園西惟中
の妻、享保十
一年(三三六)
歿、年六十二。

坪内道遙、名は嬉藏、名古屋市の人、安政六年生、文學博士、文學者。

元山は秋のとりつく色もなし
園女

忙しや莖を摘めばつくつくし
春の野遊のさま見るやうなり。
はな紙のあひだにしほむ莖かな
摘み取りし莖の花を程經て見出でて、萎れたるをも捨てかぬる女心見えてしをらし。

衣がへみづから織らぬ罪ふかし



あき入

あき入

あき入

春となり秋と移るにつけても、母の恩の深きを思ふ心根の殊勝なるを見るべし。

智月筆蹟

あき入にどんとめいたり小鳥ども
智月

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな
汗の流るゝいと暑き夏の日のさま思ひやらるゝなり。智月の句に、

鶯に手元やすめん流しもと
やさしき娘心見えて愛らしからずや。

朝顔の咲くや親にも叱られず

智月
近江國大津の
人。芭蕉の門

けさは幾つか咲き出でしなど早起するも花ゆゑ叱られぬも花ゆゑとなり。すて女の句に、
雪の朝二の字くゝの下駄の跡
これは六歳の時の句なりとぞ。秋色の句に、
雉の尾のやさしうさはる董かな

とは雉の姿の優しく



千代代筆

美しき風情を寫せるなるべし。なほ、
井戸端の櫻あぶなし酒の酔
といふ名高き句あり。花讚の句に、
かんざしよ櫛よさて世は暑いこと

花讚
傳は詳かてな

春ならばどふ行くものと梅もどき
千代尼

すて女
丹波國柏原の
人。元禄十一
年(三十三)歿
年六十四。
秋色
江戸の人、大
目氏、名は秋、
其角の門人、
享保十九年(三
十五)歿、年五
十七。

うるさきは髪かざりなり。洗髪などにて涼まばいかにとの心なるべし。

子を寝せた間をぬけ出でて涼かな

母とならではえ知らぬ涼しさなるべし。千代女の句に、

郭公々々として明けにけり

遊かるか知らねど柿の初ちぎり

驚やまたいひなほしいひなほし

破る兒のなくて障子の寒さかな

蜻蛉釣今日はどこまでいつたやら

など、いづれもめでたし。

總じて女は物に感ずること深く、かく細かきところまでも思ひやり届くゆゑ、その詠み出でたる句もまたあはれ深し。

千代女
加賀國松任の
人、安永四年の
二月廿四日、
七十四。

二三 草花歌

武島 羽衣

月を免づるみやび男が
むかふつくゑの紙の上

走れどやがて歌を筆で

星照り日出で多うたふ

天地をく繪づくみが

倚るやみなまの窓の下

動けど寝て晝は成りて

水落ち木生ひ草あはれし

武島羽衣
名は又次郎、
東京市の人、
明治五年生、
内省御歌所寄
人。

壮心鬱勃天を衝く
英雄の手小觸る、吋

落筆のもて龍蛇飛び
雲烟くらく地を蔽ふ

慷慨淋漓怒鼓立つ

志士の腕に執られても

片言隻句鬼神泣き
哀音なおく世につたふ

功成り名遂げ業平へて

身は棄てらる、竈の中

煙と化して消ゆれども
うらみぬ拳の心清しや

沼波 環 五月

二四 仁和寺の法師

一 石清水

吉田 兼 好

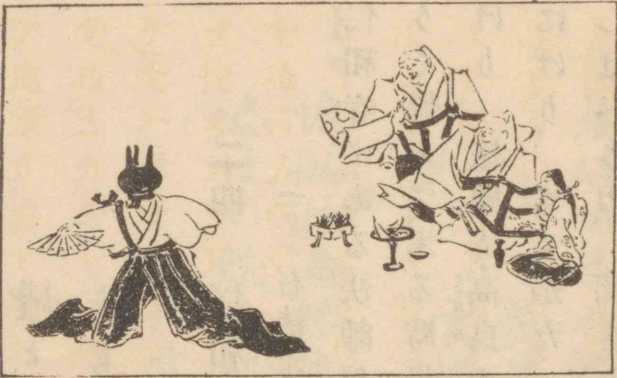
仁和寺にんげんじにある法師年よるまで石清水を拜まざりければ、心
うく覺えてある時思ひ立ちて、たゞひとり徒歩よりまうで
けり。極樂寺ごくらくじ高良たからなどを拜みて、かばかりと心得てかへり
にけり。さて、かたへの人に逢ひて、年ごろ思ひつること果
しはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そ
も参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆか

吉田兼好
本姓下部、鎌倉末期の文藝者、正平五年(1190)歿、六十九歳。
仁和寺にんげんじ京都市西、山城區葛野郡天
皇の勅願寺。
極樂寺ごくらくじ高良神社
二つとも男山の麓にある末寺末社。

しかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見
ず。といひける。少しのことにも先
達はあらまほしきことなり。

二 鼎かづき

これも仁和寺の法師、童の法師にな
らんとする名殘とて、各あそぶこと
ありけるに、酔ひて興に入るあまり、
傍なる足鼎を取りて頭に被きたれ
ば、つまるやうにするを、鼻を押平め
て顔をさし入れて舞ひ出でたるに、
満座興に入ること限りなし。暫し
奏でて後、抜かんとするに大方抜かれず。酒宴ことさめて、



浮田一蕙 筆

浮田一蕙
京都の人、土
佐派の畫家、
安政六年癸、
年六十五。

「いかゞはせん。」と惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺け
て血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんと
すれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、かなは
で、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子を打掛けて、手
を引き杖を突かせて、京なるくすしがりゐて行きけり。道
すがら人の怪しみ見ることに限りなし。くすしの許に差入
りて向ひゐたりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をい
ふもくゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見
えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺にかへりて、親
しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめど
も、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、あるものいふや
う、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなにか生きざ

らん。たゞ力を立てて引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、ひさしく病みゐたりけり。

二五 鬼作左その一

新井白石

*本多作左衛門重次は徳川家譜代相傳の御家人なり。生年七歳にて贈大納言殿に仕へまゐらせしより徳川殿の御時に至つて、度々の高名數を知らず。永祿八年三河の國盡く御手に属しければ、始めて奉行職を置かれ、本多重次かち・高力清長かち・天野康景三人に仰せて、その職を掌らしめらる。この時、三河國にて、歌に、佛高力鬼作左、どちへんなしの天野三郎兵

新井白石
名は君美、徳川中世の儒者、享保十年(一八三〇)歿、六十九。
本多重次、三河國の人。
贈大納言、徳川廣忠。
永祿八年、正親町天皇の年號。(三三三)
高力清長、三河國の人。
天野康景、三河國の人。

衛」と謠ふ。重次は恐ろしげなる男の、己がいひたきことばありのまゝに打言ひ、いかにも思慮ある人とも見え、かかる職務に堪ふべきものにあらずと見えしに、心正しく直く、しかも民を使ふに慮ありて、訟を聴き分つこと明かなりしかば、人皆徳川殿の御計ひを感じまゐらせしとなり。天正十二年、小牧の役あり。やがて秀吉秀吉・信雄信雄仲直りし給ひ、信雄について於義丸殿を養君とし給ふ時、重次が子仙千代丸も、石川伯耆守數正が子と同じく附けて參らす。抑、この於義丸殿と申すは徳川殿の御二男、故ありて生れ落ちさせ給ひしより、重次とりて養ひまゐらす。今年御歳十一になり給ふが、都に上らせ給ふことを御名殘惜しく思ひしかば、我が獨子にて愛しける仙千代丸附けて參らせたり。秀吉

天正十二年、正親町天皇の年號。(三三四)
小牧、尾張國。
信雄、織田信長の次子。
於義丸、越前少將秀康の幼名。
石川數正、徳川家の世臣。

も上には於義丸殿を養ひ參らすとは披露あれど、内々は人質とし、徳川殿に親しくならん謀なりければ、本多は殊に彼の譜代のおとななり。その子を參らせしことこそ嬉しけれ。と悦び給ふこと斜ならず。



本多重次

さるほどに、秀吉正二位内大臣に歴上り、関白の職になつて、於義丸殿にも元服せさせ、秀康と名のらせ、從四位下左少將兼三河守に任じ、信雄卿を媒とし、徳川殿御上洛のことを勧め給ふこと度々に及べども、上り給ふべしとも聞えず。よつて三河守殿も失はれさせ給ふべしなど風聞す。三河守殿の御母このことを聞き給ひ、守殿失はれ給ひ

て後、一日も世に長らふべしとも覺えず。死なば一所にこそ死なめ。とて、忍びて大阪に上らせ給ふ。

重次「いや、仙千代丸都におきて人の疑受けんことも詮なし。たゞ一人ある子失はれんも不便なり。」と思ひければ、「母がいたはり以ての外に候。暫しの暇を賜はりて、この世の暇乞をも仕らせばや。」と、守殿へ申して呼び迎へぬ。幾程なく、石川伯耆守數正は徳川殿に背きて、秀吉の御方に參る。さてこそ重次が二心をきところ顯れて、まことに思慮深くは見えけれ。

かくて関白殿の仰にて、「仙千代丸疾く參らすべし。」と、守殿よりの御使度々に及ぶ。重次もせんかたなく、これもいたはるところの候。且は母が病も年頃この子戀ひ慕ひし故な

れば、『今更參らすべしとも覺えず。』と伏沈み歎きぬ。されば
息男が身代りに、このもの參らす。』とて、甥の源四郎富正を參
らす。 関白殿、安からぬことなり。 本多奴に誑られたりけ
り。』と怒り給ふこと大方ならず。

かゝりしほどに、また東西の軍起りなんと聞えて、宗徒の御
家人の中、岡崎の城守るべきものを選ばる。 本多佐渡守正
信承りて、この城を枕として討死仕るべきものに仰付けら
るべし。』と申しければ、やがて重次召して、岡崎の城を賜はり、
數百騎の兵を属けらる。 この時重次が御暇乞申しし氣色、
生きて再び見參すべしとも見えざれば、その志を感ぜさせ
給ひて、息男成重本領安堵の御書をなし下さる。 その御書
に、天正十三年十二月八日』と記され、本多丹下殿へ』となされ

岡崎
東海道五十三
次の一、本多
氏五万石の城
下。
本多正信
小字彌八郎。

きとなり。

二六 鬼作左 その二

関白殿いかにもして徳川殿と親しうならんと、いろ／＼に
謀をめぐらし、やがてまたその妹君を徳川殿の北の方に參
らせられしかば、徳川殿この上は見參なくては叶ふまじと
て、御上洛あるべきに極る。 御家人等が危く思はんところ
も侍る故、都に御逗留あらんほどは、それに留めさせ給ふべ
し。』とて、大廳を下し給ひしかば、岡崎の城に入れまゐらせ、重
次これを守る。 井伊、大久保も同じく御後に留る。
この時、重次下知して、大廳のおはしますほとりに薪を積む
こと山の如し。 こはそもいかなることぞと驚き、大廳の御

妹
朝日姫、後に
南明院とい
ふ。

大廳
秀吉の母、姓
氏未詳。
井伊
名は直政。
大久保
名は忠世。

ぬ新曆の御賀
 預賀御萬福御
 見候御萬福御
 履新之事珍重
 令存候御者事
 無恙迎候仕候
 沙而去冬者御
 精選之一冊御
 芳惠不知所謝
 前書に幾々呈
 謝之事候定而
 其書可達几下
 奉存候猶期永
 日萬慶可申侍
 候恐惶謹言
 新井勸解由
 君美
 正月廿五日
 稻若水 稔
 賞報

供せし女房達はした女して、薪積む
 下部男一人招き、酒など飲ませ、心よ
 くとりて、さて、何事にか、このほど日
 新日にかく薪を積むことぞ」と問へば、
 井「いかなることとも下郎はいかで知
 白り申さん。たゞし、承るところは、関
 石白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、も
 筆しくは留め參らせて返し給はずば、
 蹟今度都より御下りありてこれにま
 します御方を盡く焼き殺し申さん
 料の薪」とかや申して、本多殿の下知
 として、日々に山林より伐りて候が、

この本多殿と申すは極めて氣の短き人にて、殿の御歸り遅
 し遅しと待ちかねて、けさ火を附けう、晩に焼きたてうとせ
 られ候を、井伊殿や大久保殿が「暫し〜。」と制し給へばこそ、
 今まではかくて候へ。『いたはしや、美しき都上藤の、今の内
 にも灰土にならせ給はんことの無慙さよ。』と下郎等は申す
 ことにて候。といひしを、女房達にかくといへば、あな悲しや。
 その本多といふ男が日々に参りて、恐ろしげなるこわねに
 て、「家康よりこゝに附け參らせて候。御用のことあらば承
 りなんぞ。」といふを、今思ひ合すれば、三河殿のはじめて御參
 りありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽
 じて、「あれは家康が内にて三奉行とかいふ中の鬼作左衛門
 といふものの子ぞ。」と仰ありしかば、「恐ろしく。鬼も子を

生むにや。鬼の子はいかなるものにや。」とて、物越しに人々の見たりしに、その親の鬼ならばさこそあらめ。さればこそこれへ参る度毎に、『家康歸り候はんとこのことは、未だ御沙汰も聞え候はずや。』と、をとゝひもいひしぞ、今朝も昨日もいひしぞ、待遠にや思ふらん。あはれ、家康疾くして返させ給へかし。』と、泣き口説きてこの由を大廳へ申しければ、大いに驚き歎き給ひて、日々の御消息ありて、徳川殿を疾く返させ給へ。こなたの有様のいぶせさ、いつの世にかは忘るべき。』など、ありしことどもこまゝと仰せ遣はされしほどに、程なく御歸國ましく、大廳歸り上らせ給ひければ、女房達涙を流し、情なくも御母上を下し給ひしものかな。鬼本多とかやが、とこそ言うたれ、かくこそ計らうて候ひつれ。今は

朝日の姫君を参らせ給へば、徳川殿の御爲にも大廳は御母上にて候を、いかに鬼なればとて、己が主のこと知らぬことや候べき。それにかく辛き目を見せ参らせて侍れば、はや徳川殿に仰せられて、いかなる罪にもあはせて、大廳の御恨をも晴させ給へ。』と、とりとりに訴へければ、関白殿笑ひて、家康はよきものども數多召使ひけり。秀吉もその如き家人をば欲しきことに候ぞや。』とばかり宣ひて、御座を立たせ給ひきとなり。

二七 師の君に 白岩龍子

あうらうにとの御報に接し皆々喜びの眉開き申候
 られらば長き旅の心寂あけまゝぬやう

白岩龍子 岡山の儒者故
 西一治十三年
 生、日清汽船
 株式會社專務
 取締役白岩龍
 平の妻。歌
 本篇は、その
 の師佐々木信
 綱及びその妻
 雪子の寄せて
 も、た

初ちとらまわしきひ か花物うはまのな
 やと葉下宿の うへ西湖よりか持帰り梅の
 枝花可まひや 野口極の水音びつろきありな
 うんと主人か常中宿の 所又よかきひ一洞庭
 の月夜甘露方の朝の曉東ん月の心の意に匂ひ
 出てゆいこを日と楽しみと待居ひ 一昨日は稀
 な大雪湯泉路のありり晝と及らぬ曉にひひ
 さ くれ糸色忍せまらとそわの惜しく
 候 昨日漢口通ひの大坂商船會社の船火災ま
 かりあり 乗客始り船長も危き命を助かりひ
 ひか火元は下等船客に荷物よりとのことま

湯泉路 上海。

洞庭湖 湖南省。甘露寺 江蘇省。

西湖 浙江省。野口 詩人野口寧齋。

だ詳しとくはありやすひ この笑今少し
 早うりさばソリけり心を痛めひこくと事
 なく帰ち着うせ給ひ嬉しさを殊に涼く感し
 中ひ 主人弟より喜しく中らひやい申出ひ
 とりあへんお着の水飲ひをのこ かしこ

二八 衆議院ノ國賓歡迎決議

大正十一年二月一日

午後一時三十一分開議

○議長(奥繁三郎君) 休憩前ニ引續イテ會議ヲ開キマス。

(此ノ時ジョッフ元帥正面傍聽席ニ着ク)

(拍手起ル)

奥繁三郎 京都市の人。ジョッフ 佛國元帥。

○議長(奥繁三郎君) 唯今ジョツフル元帥ガ傍聽席ニ臨マレマシタ。日程變更ノ動議ガ出テ居リマス。

○岩崎勳君 茲ニ議事日程ヲ變更シ、大岡育造君外七名提出決議案「ジョツフル元帥歓迎ノ件」ヲ議題トシ、提出者ノ説明ヲ求メ、且院議ヲ表示セラレンコトヲ望ミマス。(拍手起ル)

○議長(奥繁三郎君) 岩崎勳君ノ日程變更ノ動議ニハ、御異議ガナイト認メマシタ。政府ノ同意ヲ得マシタ。仍ツテ日程ハ直チニ變更ニ致シマシタ。茲ニ大岡育造君外數名提出ノジョツフル元帥歓迎ノ決議案、ソノ提出ノ趣旨辯明ヲ求メマス。(拍手起ル) 大岡育造君。

決議案

決議案
大岡育造君ノ提議ニ依リテ、議院ニ於テ、大岡育造君ノ提議ニ對シテ、決議案ヲ提出スルノ趣旨ヲ辯明スルコトヲ望ム。

歐洲大戰ニ於ケル佛國國民ノ義勇ト、ジョツフル元帥ノ偉勳トハ、世界ノ平和ヲ促進シ人類ノ福祉ニ貢獻スルモノ大ナリ。今ヤ元帥至高



帥元ルフツジョ

ノ使命ヲ齎シテ我が國ヲ訪ハル。兩國ノ交際益親善ヲ加フルハ我が國民ノ洵ニ慶幸トスルトコロナリ。衆議院ハ茲ニ元帥ニ

對シ特ニ院議ヲ以テ歡迎ノ意ヲ表ス。
右決議ス

(大岡育造君登壇)

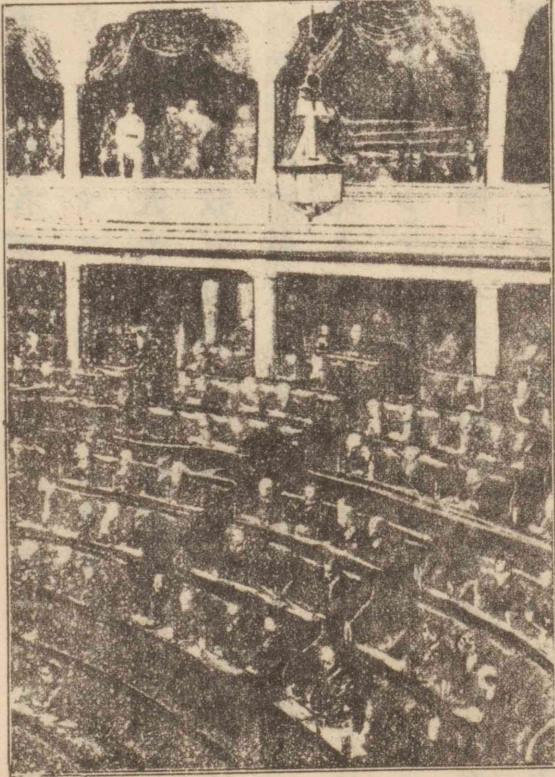
○大岡育造君 曩ニ聯合軍ノ總指揮官デアツタジョツフ

岩崎勳
靜岡縣の人。
大岡育造
山口縣の人。

ル元帥ハ、今親シク來朝セラレテ、佛國民ノ至高ナル使命ヲ
 我が皇室及ビ政府ニ致シ、本日ハ我が衆議院ヲ訪問シテ居
 ラレマス。我々ハ此ノ機會ニ於テ、院議ヲ以テ歡迎ノ誠意
 ヲ表シタイト思フノデアリマス。(拍手起ル) 私ハジョッフ
 元帥ヲ迎ヘルニ當リマシテ、先ヅ思ヒ起スノハマルヌ^{*}ノ激
 戰ノコトデアリマス。(拍手) 歐洲ノ大戦勃發ノ當初ニ於テ、
 遺憾ナガラ聯合軍ノ勢ノ甚ダ振ハナカツタ時代デアリマ
 シタ。若シ當時ジョッフ元帥ガ乾坤一擲ノ放膽ヲ作戰
 ヲ以テ局面ノ大轉換ヲナスノデナカツタナラバ、大戦ノ前
 途ハドウナツタデアラウカト思ハレルノデアリマス。(拍手)
 マルヌノ戦捷ハ眞ニ正義ノ闕ノ第一聲デアツタノデアリ
 マス。(拍手) 是カラシテ漸次ニ最後ノ勝利ニ向ツテ進ンダ

マルヌ
 佛國の東部、
 千九百十四年、
 獨佛激戦地。

メデアリマス。マルヌノ戦捷無カツセバ、光榮アル平和モ
 得ガタカツタ
 ノデアリマス。
 (拍手) ジョッフ
 フル元帥無カ
 ツセバ、正義ノ
 權威モ勝ツコ
 トガ出來ナカ
 ツタカモ知レ
 ヌノデアリマ
 ス。(拍手) 是ハシカシナガラ私ノ一家言デハアリマセン、軍
 事専門家ノ定評ノアルトコロデアリマス。(拍手)



帥元ルフヨジるけ於に室資貴院議衆

キチナー
 Kitchener

キチナー
 英國の元帥。

元帥ガイギリスノ議會ニ於テカウイフ評ヲシテ居リマス
 「ジョッフフルハ管ニ一ノ大ナル將軍デアアルバカリデナク、マ
 タ實ニ一ノ偉大ナル人格者デアアル。」ト申シテ居リマス。(拍手)
 洵ニサウデアラウト思ヒマス。偉大ナル人格者デアツテ而
 シテ後始メテ克ク此ノ重大ナ作戰ノ決行ガ出來ルノデア
 リマス。(拍手) 我々ハ茲ニ我ガ國民ヲ代表シテ、此ノ偉勳赫
 赫タル元帥ヲ迎ヘテ、深厚ナ敬意ヲ表スルノデアリマス。(拍
手) 同時ニマタ、佛國民ガ克ク此ノ人ニ託スルニ此ノ大任
 ナ以テシタ、其ノ賢明ニ對シテモ、深イ敬意ヲ表スルノデア
 リマス。(拍手) 我ガ國ト佛國トハ多年親厚ナ間柄デアツテ、
 參戰以來著シク親善ヲ加ヘタノデアリマス。ソシテマタ、
 昨年^{*}我が東宮殿下ノ佛國御訪問ト、今年ジョッフフル元帥ノ

昨年
大正十年。

來朝トニ依リマシテ、兩國ノ友交ハ愈益親厚ニナリマシタ
 ノデアリマス。(拍手) 茲ニ我々ハ決議ヲ求メルタメニ之ヲ
 朗讀シマス。

(前掲ノ決議案ヲ朗讀スル)

(拍手起ル)

○岩崎勳君 本決議案ハ原案ノ通り速ニ全會一致ヲ以テ
 可決確定セラレンコトヲ望ミマス
 ○議長(奥繁三郎君) 本案ヲ可決スルニ御異議ハアリマセン
 カ。

(「異議ナシ」「異議ナシ」拍手起ル)

○議長(奥繁三郎君) 御異議ナイト認メマスガナホ鄭重ノ式
 ヲ履ミマシテ、起立ニ依ツテ之ヲ決シマス。本案ニ賛成ノ

歸らんとしてもなほ難色あらん否、離婚をも乞ふなるべし。君が己に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、これを以ても知らる。況や京都より齋しし衣服調度の美なるものは、擧げてこれを前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敝を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、その酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、曾て君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、未だ月を重ねずして、忽ち君を杖柱とも頼むに至れり。

國君順聖院公これを聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して、大いに喜びて曰く、「吾人を得たり」と。世子天す。君悲歎に堪へず、自刃して殉せんとす。姑取縋りて泣きて曰く、「我今御身を失はば、何を樂しみてかこの世に生

順聖院
鹿兒島藩主島津齊彬

き残るべき」と。君これがため止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に、一婢ありて君が傍を離れず。また正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母若しくは姉に宛てて送らる。當時正風迂疎にして、その何の故たるを解せざりき。後に思へば、嫌疑を遠ざ

春日さすふちのはつ花みそなはすみこいろいかにのどけかるらん
正風

正風筆蹟

くる用意の周到なりしなり。嗚呼、忠孝慈貞誰かこれに加へん。後久光公の女光蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。

久光
齊彬の弟、明治の初左大臣となつた。
光蘭夫人
名は貞姫。

春日さすふちのはつ花みそなはすみこいろいかにのどけかるらん
正風

明治八年に至りて、坤宮女流の人材を徴し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來兩陛下御文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫を始め、同僚宮女のために百事の質疑に應ずるまで、日夜安息するに違あらず。君もと蒲柳の質、しかも公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年大いに病むところありき。天皇陛下君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとし給ひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素嫌厭せし牛乳を服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて宮中に入り、鞅掌するごと故の如し。

坤宮
昭憲皇太后。

嗚呼、君が八百年以來たゞ一人の女文豪たりしことは、世人皆これを知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食よりも甚しく、我が彰善會の起るや、尤も熱心なる賛成者として、金員を寄附せらるゝこと數なりき。君去んぬる一月五日、正風が病床を訪ひて、告げて曰く、明年七十七、謂はゆる喜字の齡たらんとす。聊か自ら壽すべし」と。正風大いにこれを賛し、ために盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今は遂に全く畫餅となりぬ。正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて、葬場に會するをだに得ざるは、何等の慘ぞ、何等の痛ぞ。豈に慟哭せざるを得んや。病を勗めてこの誄を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼、哀しいかな。

彰善會
善行を表彰する會、作者はその會長であつた。
一月
明治三十三年

元彦
正風の長男、
海軍少佐、
明治三十七年旅
順て戦死した。

三〇 明治大正の和歌

富士の嶺を空に残して鳥が鳴く

高崎正風

東路とほくかすみたなびく

税所敦子

おぼろ夜の月こそかゝれ古の

垣根こひしき枝垂柳に

金子薫園

青々と梢しげりて庭の木

あかるき中に蜂のうなれる

海上胤平

金子薫園
名は雄太郎、
東京市の人、
明治十年生、
歌人。

海上胤平
千葉縣の人、
歌人。大正
五年、
八十八年。

はた、神鳴門を過ぎて夕立の

あまぐもかゝる葛城の山

若山牧水

いづくにか父の聲聞ゆこの古き

大きなる家の秋のゆふべに

與謝野晶子

若山牧水
名は繁、宮崎
縣の人、明治
十八年生、歌
人。

與謝野晶子
鐵幹の妻、明
治十一年生、
歌人。

汀來る牛飼をとこ歌あれな

秋のみづうみあまり寂しき

川田順

秋暑き土のほてりのしかすがに

ゆふべ冷え來て虫鳴き出づる

小出祭

川田順
東京市の人、
明治十五年生、
住友製鋼所支
配人、歌人。

小出祭
島根縣の人、
歌人、御歌所
寄人、明治四
十七年、
七十八年。

木枯に吹きさらされて山松の

影さへ瘦せし心地こそすれ

佐々木信綱

死を期する鐵騎三百江に沿うて

南にいそぐこがらしの風

與謝野鐵幹

野に生ふる草にも物をいはせばや

涙もあらん歌もあるらん

落合直文

父上よけさはいかにと手をつきて

問ふ子を見れば死なれざりけり

尾上柴舟

行きつまりつまれば道を拓きゆく

まだわが力ゆたかなるかな

窪田空穂

菓子さらひ逃げて行く兒の後つき

あはれ大きくなりにはけるはや

石川啄木

たはむれに母を背負ひてそのあまり

軽きに泣きて三步あゆまず

三一 西行法師

新保磐次

文治二年八月十五日、源頼朝鶴が岡の社に參詣しけるに、一人の老僧鳥居の邊に徘徊せり。景季を以てその名を問は

佐々木信綱
三重縣の人、
明治五年生、
歌人、文學博
士。

與謝野鐵幹
名は寛、京都
市の人、明治
六年生、歌人。

落合直文
宮城縣の人、
國文學者、明
治三十四年
四月十三日
生、尾上柴舟
名は八郎、岡
山縣の人、同
治九年生、東
京女子高等師
範學校教授。

窪田空穂
名は通治、長
野縣の人、同
治十年生、歌
明長

石川啄木
名は一、岩手縣
の人、歌人、明
治四十五年
生、新保磐次
號は一村、新
潟縣の人、文
章家。

文治
後鳥羽天皇の
年號(二合一
二八)

鶴が岡の社
鎌倉にある、
今、國幣中社。
景季
通稱源大、景
季の長子。

しむれば、佐藤兵衛尉義清（のりひら）法師なり、今は西行と號す。」と答ふ。
 義清は天慶の乱に平將門を斬りし藤原秀郷（ひらひら）が嫡流にして、
 代々弓馬の道を傳へ、西行法師としては當時第一流の歌人
 なりければ、賴朝大いに喜び、奉幣後心靜かに對面すべき旨
 を言ひ遣はす。西行領承して、その間宮寺を巡拜す。
 賴朝早速營中に歸りて西行を召し、歌道並に弓馬のことを
 問ふ。西行曰く、弓馬のことは在俗の當時惣に家風を傳へ
 たりといへども、保延三年八月遁世の時、秀郷朝臣以來九代、
 嫡家相承の兵法悉く焼失す。思へば罪業の因たるによつ
 て、そのこと曾て心に殘し留めず、皆忘却し了んぬ。詠歌は
 花月に對して感を動かすの折、僅かに三十一字を作るばかり
 なり、全く奥旨を存ぜず。されど恩問等閑ならざる間、弓

藤原秀郷、
田原藤太、下
野撮押領使。

保延
崇徳天皇の年
號。七五十一、六



みんかたに
あはれし
まこと、
秋の
あはれ

西行法師 (菊地容齋筆)

馬のことに於てはあら
 あら申すべし。」とて、終夜
 語り明しけるを、賴朝侍
 臣をして筆記せしめけ
 り。この西行が談話は、
 長く鎌倉武士が弓馬の
 故實を論ずるの憑據と
 なれりといふ。
 翌日午の刻に西行退出
 す。賴朝頻りに留むれ
 ども聽かざるにより、銀
 にて造れる猫を贈りし

菊池容齋
名は武保、江
戸の人、畫家、
明治十一年
歿、年九十一。

に、西行これを受けて出で、門外に遊べる兒童に與へて去りぬ。西行は南都東大寺再建につき、俊乗坊重源と約諾して、沙金勸進のため奥州に下る便路を以て、鶴が岡に巡禮したるなり。奥州の秀衡入道は同じく秀郷の子孫にして、西行と一族の縁あればなるべし。

義清在俗の日、鳥羽上皇に仕へ、北面の士として恩寵比びなかりしが、常に世の無常を觀じて、遁世の志あり。嘗て同族なる左衛門尉憲康と鳥羽殿より歸る時明朝また同伴して參るべきよし約せしが、明くる朝往きて見るに、憲康昨夜頓死せしといふ。これより義清出家の志益固く、屢陳情して官を辞しけれども、上皇その材を惜しんで許し給はざりき。一日義清外より歸りけるに、今年四歳になりける女子喜び

東大寺
華嚴宗の總本山
聖武天皇
創建

秀衡
藤原氏、鎮守
府將軍陸奥

鳥羽上皇
第七十四代。

て出迎へ、衣に縋りて戯れけるを見て、義清いとほしさに堪へず、忽ち猛然として思ふやう、我が出離生死の道を妨ぐるものはこれなり、まづこの縋を絶つべしと、即ち女子を床の下に蹴落して走り出で、その夜遂に嵯峨に往きて出家しけり、時に年二十三、法名を圓位といひ、また西行と號す。西行

嵯峨
山城國、京都
の西。

思へらく、出家に家なし、抖擻行脚して身を終ふべし。とて、東西諸國足跡の到らざるところなく、折にふれ時につけ、諷詠吟哦して一生を終へたり。その妻もまた尼となりて高野に居り、道心堅固なりき。

高野
和伊國、紀の
川の南岸、金剛峰寺がある。

義清家豊かに、年若く、才を抱き、時に遭ひながら、一朝世を捨てて顧みず、時の人皆感嘆せり。しかれども、一心の満足を得んがために妻子を捨てて顧みざるは、佛者學者及び藝術

家の悪癖なり。義清の西行またこの非難を免るべからずと雖も、その和歌は即ち天成の妙品にして、作らず飾らず、寂びたる中に情味を含むは、他人の企て及ばざるところなり。彼が伊勢神宮に詣でし時、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

と詠めるは、最もその天真爛漫を見るべきものなり。相州大磯にて、

心なき身にもあはれは知られけり

鳴立つさはの秋のゆふぐれ

と詠めるは、彼が得意の作なりと称す。その歌集を山家集といふ。

自修文

一 正月前

沼波 瓊音

十二月の半ば頃の午後、大橋の家での出来事でした。八つになる道子は、子供部屋で、お友達のK子さんとM子さんと盛に双六に興じてゐました。

この話を讀む方は、大橋の家が貧乏で、親も子もみんな着たきり雀だといふことを承知してゐて下さい。そして、彼の子供達のいつてる學校は、可なり豊かな家の子が多くて、着物など殊に近頃伊達を競ふといふやうな傾向があるといふことも承知しておいて下さい。

彼の妻の春枝は茶の間で針仕事をしてゐました。道子の姉の十一になる文字は、部屋を双六で占領されたので、客間へ来て、宿題をしてゐました。大橋は例の通り書齋で書き物をしてゐました。

沼波瓊音 名は武夫、名古屋市の人、明治十一年生、文學者、第一高等學校教授
興ず たのしむ
着たきり雀 現に着てゐるだけしか着物を有たぬこと
伊達 はで。



家中しんとして、たい双六をやつてる
子供達の聲ばかり賑かに聞えてゐま
した。

その中、K子さんが調子高な聲で、

「あたし、お正月が来るのが楽しみだわ。
式にはネ、あたし洋服だけれどもネ、
御年始には、縮緬の長い袂の着物を
着てネ、おたてに帯を結んでネ、卵色
の扱帯締めてネ、あたしのネ、あの、ホ
ラ、自分の名前をちやんと刷つたネ、
名刺を持つて、あたしがまはるのよ。
うちでネーこの四音をハ調4745
67といふ工合にいつてー羽根つく
時にはネ、博多の帯の方を結ぶのよ。」

すると、M子さんの聲で、

「わたしだつて、縮緬の長い袂の着物着るのよ。だつて、わたし洋服なんか
着ないわ。わたし、學校がお休みになるとネ、お母さんと三越にいつて、函
迫買つていたいくのよ。御大典模様の函迫なの。ソラ、八千代ツて煙草
があるでしょ、あゝいふ繪を一杯に刺繡つたのよ。さうしてネ、あなた、鎖
は銀なの、ほんとの銀ですつて。」

さあ、道子がどうしても何か着物のことをいはねばならない順番になつた。
なんとといふだらう、さつきから黙つてゐるが、困つてるんだらうか、平氣であ
るんだらうか、わたしも縮緬の着物を着るの、などと、嘘を吐きやしないぜら
うかと、さつきから宿題の鉛筆を休めて聽いてた文子は、一所懸命に耳を敲
てました。大人でいふと、今、道子は我等を代表して公衆の前に立つてゐる。
道子はいかなる言を吐いて、我等の威嚴を護らうとするかと、期待する心持
で、非常に緊張して耳を敲てたのでした。春枝も仕事をしながら、どういふ
だらうと、息を凝してゐました。

函迫
婦人の懐に挟
み持つ一種の
紙入。

期待
まぢまうける
緊張
ひきしまる、
はりつめる。

この間一寸聲が途切れて、

「早くおしなさいよ。」

道子は無造作にかういひました。K子さんどM子さんの心が、はつと双六に歸つたさまが、聽いてた人々の目に見えるやうでした。

K「アラ、あなたの番ぢやないの。」

M「アラ、いやだ。」

三人「ハ、ハ、ハ、」

かうしてまた、「イニウ三イ四オ。」とか、「お休み。」とか、「上つたワ。」とか、もとの双六の話になつて進行していききました。

この「早くおしなさいよ。」の聲を聞いた時、文子は母の所へ飛んでいつて、兩肩をきゆつとすぼめ、母の顔の前へ自分の顔を突き出して、思ふさま笑ひました。その時、母も疊を平手で打つて笑ひました。大橋もおのづと腰が浮いて、茶の間へのそくと出て、立つたまゝ、春枝と文子とを見下して、にたくとしました。

無造作
たやすいこと

この時、この三人の心には、道子に對する一種たまらない喝采のやうなものが湧き立つてゐました。

二 原前首相靈柩の出發

秋の夜の憂愁をしみんと覺える大正十年十一月七日夜、數日前意外の凶變に遭つて冷たい骸となつた一代の平民宰相原敬氏が、錦を着て歸るべき故郷盛岡へ、永劫の眠を續けつゝ出發するのだつた。これを送る東京の人人も、これを迎へる盛岡の人々も、この大政治家の忽然たる逝去が、全く夢のやうに思はれてならないだらう。さもこそ、その夜は、冬ならなくに、冷かな風が頻りと身に沁むのだつた。

名残惜しい時の刻みは次第に移つて、午後八時、政友會本部では、大慈寺住職を始め數名の僧侶が、靈柩に向つて、東京に於ける最後の讀經をする。政友會黨員は齊しく瞑目合掌する。靈柩は更めて長さ六尺五寸幅二尺四寸の檜の白木造の箱に納められようとする。この時、人々の列の間を抜けて、切髪

喝采
ほめたてること。

憂愁
うれひ。

凶變
原敬

原敬
盛岡市の人、

政友會總裁、

内閣總理大臣、

大正十年十一月四日東京驛で殺された。

永劫
永久。

政友會本部
芝區にある。

大慈寺
盛岡市にある。

原家の檀那寺
靈柩

死骸を入れる

ひつぎ。

瞑目
目をとぢる。

合掌
手のひらを合

せる。

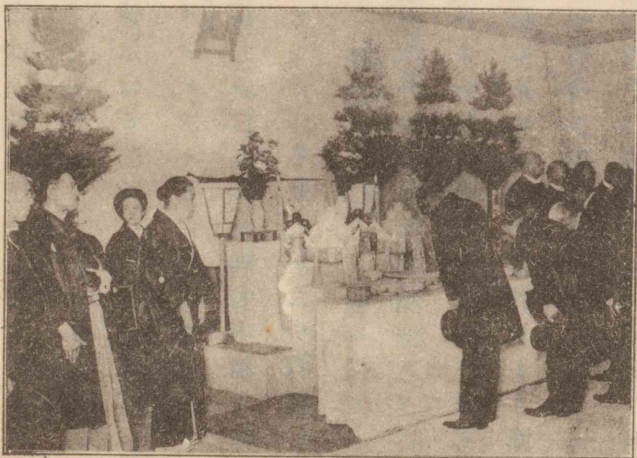
姿の一婦人が前方に現れた、いふまでもなく淺子未亡人だ。その面上には、深刻な哀愁の痕がまざくと窺はれる。未亡人の髪は、納棺式の時に、幾とせの思出をこめてぶつつりと断ち切られたのだつた。廣岡氏、小川氏等が先に立つて、數名の白丁が靈柩を運ぼうとする。未亡人は、頭と脚との方向を間違へないやうに、と注意し、その仕事の終るまで數珠を爪繰つて、靜かに「南無阿彌陀佛」と唱へながら、石像のやうに立つてゐる。その姿が痛々しい。やがて、白羽二重に覆はれた靈柩は、白布に清淨の氣を漂はせた廊下を通つて、表玄関に運ばれ、そこに待ち構へてゐる自動車に納められる。その後部には、特に、公爵西園寺公望と誌した花輪が飾られる。政友會黨員は、悲愁に曇る眼をしばたたく、婦人連は鼻をすゝる。靈柩に續いて玄関に出た未亡人も、自動車内の人となつた。かくて、葬儀委員、原家の近親、その他いづれも自動車に乗り、ざはめきの中を



敬 原

次第々々に繰出す。列は古市鐵相秘書官を先導に、僧侶靈柩未亡人のそれぞれの自動車が續き、その後、故人の令弟原誠氏及び葬儀委員高橋光威、福井三郎の兩氏、それから政友會本部代表の岡崎總務、親戚の人々が續いて、自動車の總數實に五十台に上り、青白い灯が哀愁をそゝる中を、靈柩は自邸と政友會本部とに永久の別を告げて、轍の音もしめやかに出發した。時に八時半。

政友會本部の前は見送の男女の群で充ち満ちてゐる。それらの人々は皆心底からの永訣の意を表さうとして、さながら水を打つたやうに靜肅に控へてゐる。靈柩の一行は御成門から愛宕町を電車道に沿ひ、神田橋を経て、小川町から



(子淺原頭先方左) 式別告柩靈敬原

淺子 岩手縣の人、もと菅野氏、大正十二年、歿年五十三。廣岡氏、名は宇一郎。小川氏、名は平吉。白丁 白衣を着た使丁。

西園寺公望 前政友會總裁

古市秘書官 名は強哉。

高橋光威 福井三郎 ともに政友會黨員。岡崎總務 名は邦輔。

轍 車の輪。

永訣 永のわかれ。

昌平橋を渡り、一路上野驛に進む。沿道には十數万の市民が兩側に堵を作つて、亡き偉人の靈に敬意を表し、その間、電車は運轉を中止し、都大路の煌々たる夜の光も、この夜はそらに悲みを深くさせた。

この夜の九時前後に上野驛が描き出した情景ほど悲壯なもの稀だつた。そこにはたゞ見送の人々のフロックとシルクハットと白襟と黒紋服と、その黒い色に相應しい氣分で作られ出した甚しい雑沓と、一國の總理大臣の靈柩を見送る時にだけ示されるであらうところの名狀しがたい複雑な感動とがあるばかりだつた。

九時十分、數町に互る葬列の到着するや、驛の内外に溢れた見送の人々は一齊に頂垂れる。靈柩車は第二プラットフォーム第三番線に待ち受けてゐる列車に横付になる。未亡人は弟の誠氏等に扶けられて自動車から降り立つたが、あの禍の夜から連日の不眠不休の疲勞に加へて、變り果てた四邊の光景に胸を打たれてか、打倒れんばかりに列車の窓に手をかける。靈柩の移された窓には、カーテンが影暗く垂らされ、ドアは堅く鎖された。

堵 堵かき。
煌々 きらめく形容

雑沓 こみあひ。
名狀 形容。

頂垂れる 首を下げる。

疲勞 つかれ。

未亡人が靈柩車の後部近親婦人室に入ると、隨行の僧侶は前部の室に乗込む。同行の葬儀委員、參列者先登の岡警視總監その他は、柩車の後部に連結されてある一等寢台車に入り、見送の人々は悉く柩車の前に集つて、最後の告別をする。齋藤朝鮮總督、徳川伯小笠原伯秋元子等の顔が見える。やがて柩車のドアは開かれ、中から未亡人は數珠片手に進み出て、見送人一同に一々謝辭を述べる。最後に、高橋藏相野田遞相山梨陸相元田鐵相床次内相山本農相大木法相など、閣僚全部が整列して、暗然と差俯く。讀經が済むと、ドアはまた鎖された。列車は今や出發しようとする。この時、政友院外團の一人が聲を揚げ男涙を流して、

「閣下！ 閣下には直接間接に大層お世話になりました。今お別れせねばならぬのは實に残念です。國家のため一身を賭して、閣下の御意志は必ず我々が継ぎます。」

と、我を忘れて哀哭する。未亡人の眼には遂にハンカチが當てられた。嗚

Handkerchief

岡警視總監 名は喜七郎。
齋藤總督 名は實。
徳川伯 名は達孝。
小笠原伯 名は長幹。
秋元子 名は春朝。
謝辭 禮の言葉。
高橋藏相 名は是清。
野田遞相 名は卯太郎。
山梨陸相 名は牛造。
元田鐵相 名は鐵。
床次内相 名は竹二郎。
山本農相 名は達雄。
大木法相 名は遠吉。
閣僚 内閣員。
賭す かける。
哀哭 かなしみなげ
嗚咽 鳴む。

咽のどの聲が洩もれる。

やがて、發車を告げる鈴かねの音がけたましく併し寂しく響き渡ると、プラットフォームに眞黒になつて立つてゐる數千の見送人は、言ひ合せたやうに靈柩ろうきゅうを瞪つめて黙禮する。かくて、正十時、秋風の夜空に長々と汽笛を残して、淋しい列車は帝都を離れた蒼蒼い／＼月光を浴あびながら。

三 北海道の印象

有島武郎

私は前後約十二年間北海道で過した。しかも、それは私の生活としては最も大事だと思はれる時期で、最初の時は十九歳から二十三歳まで、二度目の時は三十歳から三十七歳までゐた。だから、私の生活は北海道に於ける自然や生活に影響えいじやうされた點が相當多いに違ない。けれども、今までこれこそ北海道で受けた影響だと自覺するやうなものを持つてゐない。私が格別そんなことを考へて見たこともないのに依るかも知れないが、一つには、十二年間も北海道で暮しながら碌々ろくろく旅行もせず、その生活とも深い交渉かうわうを

有島武郎
東京市の人、
明治十一年生
文學者。

影響
さしひびき。

交渉
かゝりあひ。

持たないで過して來たのが原因であるかも知れない。

しかし、とにかく、あの土地はやはり私には忘れられないものとなつてしまつてゐる。この間も、長く北海道にゐた人と話した時、あすこにゐる間は、いやな所だと思ふことが度々あつたが、離れて見ると、なんとなく懐かしみの感じられる所だ。といつたら、その人も自分の思つてゐることを言ひ現してくれたといふやうに、心から同意した。長く住んでゐた所は、どんな所でもさういふ氣持を起させるものではあらうが、北海道といふ土地は、特にさうした感じを與へるのではないかと思ふ。

北海道といつても、さういふことを考へる時、主に私の心の對象たいしやうとなるのは、住み慣れた札幌とその附近とだ。一體に、長い冬のある所は變化に乏しくてつまらないといはれるけれども、決してさうでない。變化は却つてその方に多い。雪に埋れる六箇月間は、なるほど短いとはいへない。もう雪も解け初めさうなものだといら／＼しながら思ふ頃に、また空が雪を止とど度もなく降らせる時などは、心の腐るやうな氣持にならないではないが、一度春

對象
客觀の事物。

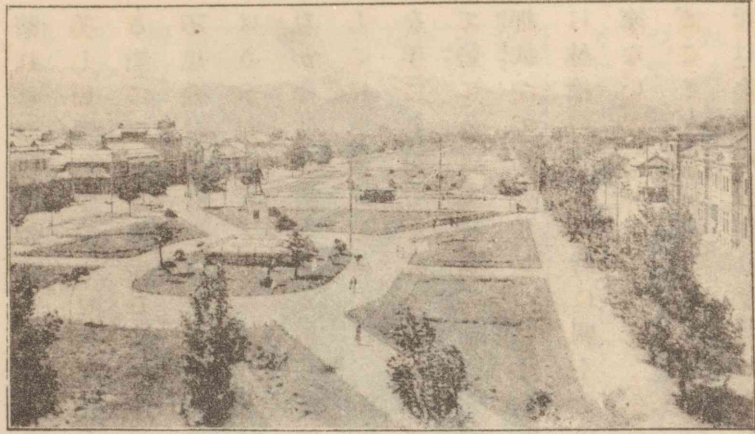
が訪れると、その嬉しい變化は、今までの退屈を補ひ盡してなほ餘りがある。冬の短い地方では、どんな嚴冬でも、草もあれば、花もある。人の生活にも或華やかさが伴うてゐる。けれど、北海道の冬になると徹底的に冬だ、凡べての生命の存在が殆ど不可能になりはしないかどさへ思はれるほどの冬だ。それが春に入ると、一時に春になる。草のなかつた所に青い草が生える、花のなかつた所にあらん限りの花が開く、人は言葉通りに新に甦つて来る。あの變化、あの心の中にうづく／＼と捲き起る生の喜び、それは恐らく熱帯地方に住む人などの夢にも想ひ見ることの出来ない境だらう。それから、みづみづしく青葉に埋れていく夏、東京あたりと變らない晝間の暑さ、眼を細めたいほど涼しく暮れていく夜、また晴れた日の長い華やかな秋、晴樹は一つ一つに自分自身の色彩を以てその枝を装ふ小春、それは山といはず野といはず、北國の天地を悲壯な熱情の舞台にする。

或牙えた晩秋の朝だつた。霜の上には薄い牛乳色の霧が青白く濺んでゐた。私は早起をして、表戸の所に新聞紙を取りに出ると、東の方にあつた二

徹底
極端までとほ
ること。

甦る
生き返る。

色彩
いろどり。
小春
秋。



三 北海道の印象

札幌市街

箇の太陽を見出した。私は顔も洗はずに、天文学に委しい或教授の許に駆けつけた。教授も始めて實物を見るといつて、私を二階の窓に案内した。やがて、太陽は縦に三つになつた。そして、その左右にもまた二つの幽かな光體を發見した。それは、或氣温の關係で、太陽の周圍に白虹が出來、なほ太陽を中心として十字形の虹が現れるのだが、その交叉點が殊に光度を増すので、眞の太陽の周圍四箇所に光體に似たものを現す現象で、北極圏内には屢見られるのだが、この邊では珍しいといつて説明してくれた。また、私の家で、夜遅くまで科學上の議論をしてゐた一人の若い科學者は、歸途

交叉點
入りちがふ點

晴れきつた冬の夜空に、探海燈の光輝のやうなものが、或は消え或は現れて、美しい現象を呈したのを見た。彼は好奇心のあまり、小樽港に碇泊してゐる船について調べて見たが、一隻の軍艦もないことを知つた。そして、その不思議な光は北極光の餘燄であることを略、確めることが出来た。北海道はさうした所だ。

私が學生生活をしてゐた頃には、米國風の廣々とした札幌の道路のこゝかしこに林檎園があつた。そこには必ず小さな小屋があつて、誰でも五六錢を手にしていくと、二三人では喰べきれないほどの林檎を枝からもぎとつて、籃に入れて持つて来て喰べられた。白い粉の吹いたまゝな皮を着物で押拭つて、丸かじりにしたその味は忘れられない。春になつて、それらの園に林檎の花が一時に開くそのしみぐとした感じも、到底忘れることが出来ない。

ごことなく荒涼とした粗野な自由な感じ、それは生面の人を脅威するものではあるかも知れないが、住み慣れたものには捨てがたい靈感だ。あすこ

好奇心
碇泊すきな心。
碇泊
ふながかりす
る。
餘燄
残りの光。

荒涼
荒れて物凄
いこと。
生面
初め。

に住んでゐると、自分といふものがいかにもはつきりして来るやうに思はれる。艱難に對しての或勇氣が生れ出て来る。銘々が銘々の仕事を獨力でやつていくのに或促進を受ける。これは確かに北海道の住民の特異な氣質となつて現れてゐるやうだ。若しあすこの土地に人爲上にもつと自由が



黒田 隆清

許されてゐたならば、北海道の移住民は、日本人といふ在來の典型に、或新しい寄與をしてゐたかも知れない。歐洲文明に於けるスカンデイナビヤのやうな、または北米文明に於けるニューイングランドのやうな役目を果たすことが出来てゐたかも知れない。最初、北海道長官黒田氏は、そこになると、なんといつても面白いものを持つてゐたやうだ。あの必要以上に大規模と見える札幌市街の設計について、も、その一斑を知ることが出来るが、米國風の大農具を用ひて、片端からあの

脅威
おびやか
かしお
どす。
靈感
まどはし。
促進
うながし進
めること、せ
き
たてること。

典型
かた。

黒田
名は清隆、鹿
兒島の人、伯
爵、明治三十
一年、年六十
一。
長官
北海道開拓使
長官。
規模
規、かまへ。
一斑
一端。

未開の土地を開いていかうとした跡は、私の學生時分にさへ所在しよざいに窺うかがひ知ることが出来た。例へば、大木の根を一氣に抜き取る蒸氣拔根機じょうきばつこんきが、その奏効そうこうのあまりに偉大なために、使つかひ所ところがなくて、錆さびびたまゝ捨ててあるのを旅行の途次とじに見たこともある。少女の何人かを逸い早く米國に送つて、それを北海道の開拓者の内助者たせようとしたこともある。當時米國公使として令名れいめいのあつた森有禮もりあり氏しに、是非米國婦人を妻として迎へよと勧めたといふのもその人だ。しかし、黒田氏くろだしのかゝる氣持は、次代の長官以下には全く忘れられてしまつた。惜しいことだつたと私は思ふ。

四 ダリヤ

ゆつたりと落着きすまし赤々とダリヤ咲きたり雑草の中
茅野雅子
生きながら我がくろかみを猿澤さるさわの池の玉藻たまもとめづる浴室よせしよ
與謝野晶子

茅野雅子
茅野雅子、儀太郎の妻。
森有禮
熊本の人、子爵、文部大臣、明治二十二年致、年四十二。

鳥も鳴かず静かなる日よ我が魂たまのかそけき響空きやうくうに聞ゆる

片山廣子

片山廣子
日本銀行調査局長片山貞次郎の妻。

朝ごとに若き命を削り行くくせものなれど鏡かがみはいとし

久保よりえ

久保よりえ
醫學博士久保猪之吉の妻。

夜深く一人目ざめてつくつくとあこが寝顔を見入りたるかも

山田邦子

山田邦子
本名今井邦枝。

うつくしうありたき願をとめ子は青葉の窓まどに薄化粧うすけしよする

河杉初子

河杉初子
奈良縣の人。

五 女子海外留學の先驅

日本から公式に留學生を西洋に送つたのは、徳川幕府の末期からのことで、現に文久二年の頃、オランダへ遊學を命じられた人に、内田恒次郎、澤太郎、左衛門伊東玄伯、林研海、榎本釜次郎、赤松大三郎などといふ顔觸かほぶのあつたことが記録に出てる。無論オランダのことだから、此等の人々の學んだもの

文久二年
孝明天皇の年號。(五三)
榎本釜次郎
後に武揚といふ。



(勝海舟・安芳・明治三十二年) 勝海舟・安芳・明治三十二年

は主として航海術だつた。また慶應三年に勝海舟はその子息をアメリカに遣はして勉強させた。富田鐵之介本間英一郎兒玉章介白峰駿富なども名はあまりに知られてゐないが、當時やはり留學生としてアメリカの學窓生活を送つた人である。
明治四年は十一月十二日の風の朝、横濱沖に堂々として碇泊した米國船に、快い海氣を胸一杯に吸ひこみながら、いそ／＼として乗りこんだ活潑な五少女があつた。傍には歸國の途にある時の米國

慶應三年
明治元年の前
勝海舟
名は安芳、明治三十二年、年七十五

全權公使の夫人があつて、なにくれとなく親切に世話してゐるのも美しい情景だつた。

その一團の中、二人は妙齡の華やかな光彩を放つてゐたが、他の三人はまだ文字通りの少女だつた。この人達は、皆お名残に、振りの長い友禪縮緬の着附であつた。でも、その澄んだ眼色には、理智の輝きと氣高い憧憬の情緒とが讀まれた。この少女達は、その二三日前宮内省に召出されて、皇后宮から賜はつた立派なお書付を、現に大事に持つてゐる人々だつた。

「其方女子ニシテ洋學修業ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候。追々女學御取建ノ義ニ候ヘバ、成業歸朝ノ上ハ、婦女ノ模範トモ相成候様心掛、日夜勉勵可致事。」と、かうあつた。これぞ日本に於ける女子留學生の先驅者だつた。

この五少女は果して誰々だらう。當時係船員の手帳には、次のやうに誌されてあつた。

Oshimatsu; Oneda; Yamagawa; Tsuda; Nagai.

これを正誤して、詳しく書けば、

情景
ありさま。

妙齡
年頃。

憧憬
あこがれ。

情緒
感情。
皇后宮
昭憲皇太后。

神妙
けなげ。

先驅
さきがけ。

吉益亮子(十五歳) 上田悌子(十六歳) 山川捨松(十二歳) 津田梅子(七歳)
 永井繁子(十二歳)

その頃、拓殖の新知識を米國に得た黒田北海道開拓使長官は、同時に併せて女子教育の上にも力のある暗示を受けて、熱心な主張者であり擁護者だった。その結果、終にこの女子の留學てふ破天荒な盛事の一端を産んだのだつた。いふまでもなく、その津田梅子とは今日の津田英學塾長で、山川捨松とは故大山巖元帥の夫人で、上田悌子とは故上田博士の母堂となつた人であり、また、永井繁子といふのは、曾て東京女子高等師範學校の教授だつた人である。

この事あつて以來、女子教育の必要を叫ぶ聲が諸所に起つて來た。そして、明治五年二月に至つて、大學南校中の一部に初めて女子のための學校が出來た。その頃の女子教育は、例の万事が直譯時代のことで、殆ど洋學本位で、程度の非常に高かつたことが容易に想像される。

暗示 それとなしに注意を起させること。
 擁護 保護。
 破天荒 これまでにならなかつたこと。
 津田梅子 東京市の人、元治元年生、英學者。
 大山巖 鹿兒島の人、陸軍大將、公卿、大正五年、西、年七十五。
 上田博士 名は敏、東京市の人、東京大學博士、英文學部教授、帝國大學、西、年四十三。
 銀座 京橋區。

六 エトランゼエ

島崎藤村

エトランゼエ即ち外國人といふ言葉は、遠く東洋から旅して來たものの胸に、一種の言ひ表しがたい響をもつて迫つて來ます。東京で銀座通などを歩いてゐる西洋人を見かけると、「あゝ、異人が通るな」とよく自分でもいつたものです。さういつた自分が、當地へ來て見ると、丁度反對の位置に立つことを感じます。今は私の方が異人です。「あそこに立つてゐるのは支那人かねえ。」「なあに、あれや日本人だ。」船着場などで、この旅稼ぎの夫婦者かと思はれるやうな西洋人から、かういふ頗る侮蔑の調子を帯びた言葉か、しかも、言葉が通じないと思つて、自分の鼻の先で交換されるのを聞いた時には、胸が悪くなりました。私は日本を出る時に、或友人から「フランスの人は、ゴール人といつた昔の時代から、外國のものを優遇して、種々な土地の話を聞くことを好んだ人種だ」と聞いて來ました。船に乗つて見、港に着いて見、この都會に來て見ると、なるほど、フランス人は外國のものに對して、寛大で、

島崎藤村 名は春樹、長野縣の人、文學者、西、年四十三。
 野村胡堂 名は野村、長野縣の人、文學者、西、年四十三。
 銀座 京橋區。
 當地 こゝはパリを指す。
 侮蔑 あなどりないがしろにすること。
 ゴール人 ケルト人の一派、風に歐洲の中部に於てあつたが、盛で、一、二世紀頃、西、年四十三。
 優遇 厚くもてなす。



歌川廣重

される言葉です。「これといふのも皆戦争のお蔭だ。」それもよく聞かされる言葉です。しかし、戦争以外に何一つ日本人の誇るべきものがあるか、何



葛飾北斎

一つ善いものがあるか。かういふ言葉が同胞の口から出るのを聞く毎に、これほど自分で自分を卑しめる心を持つ人達が、我が同胞の中にもあるかと思つて、腹だたしくなります。かういふ人達の眼には、維新以来の日本の青年が何程の努力をして來

同胞
こゝは日本國
民のこと。

努力
ほねをり。

たかといふこともよくは映らないし、また過去に於て自分達の先祖がどういふ精神を持ち、どういふ教養を重ね、どういふ産物を遺しておいてくれたかといふことさへ、眞實には映つてゐないのだと思はれます。自分達の同胞の中にすら、平氣でかういふことをいふ人があります。まして、生麥事件あたりからの攘夷の記録を読み、乃木大將の自殺を新聞紙の上で知り、日本人の芝居などを見て、「腹切」と日本人とを聯想するやうな一般の歐洲人には、どんなに自分達が映るだらうか、思ひやられます。私は異郷の客となつて、今更のやうに藝術の尊さをつくぐと感得しました。そして、異人種と異人種が互に理解し、眞に互の美質を知合ふのに、藝術ほど近くて正直な道はないといふことをしみじみと感じました。もしも、ヨーロッパが私達の先祖の胸に恐ろしい幽霊のやうな「黒船」と直ちに聯想されるやうに、たゞ物質的の威力を以て迫つて來るだけで、ロシアの文學も傳はらず、ドイツの音楽も傳はらず、フランスの繪畫も傳はらないとしたら、どうでせう。ヨーロッパ人といふものが眞實に自分達に解つたのは、彼等

生麥事件
文久二年島津
久光が江戸か
らの歸途、武
藏國生麥村で
斬つた。英人
從士が英人を
ては幕府に迫
つた。英人を
斬つた。英人
を斬つた。英
人を斬つた。
乃木大將
名は希典、大
正元年九月十
三日自殺。
聯想
一つのことか
らそれに関係
のある他のこ
とを思ひ起す
こと。
異郷、他國。

三年口組

田坂

三
廿
丁